

アーキペラゴ

Archipelago

R. A. ラファティ^{*1} 訳：山形浩生^{*2*3}

2005年4月7日

^{*1} ©1973 R. A. Lafferty

^{*2} <http://cruel.org/>

^{*3} ©2002 山形浩生 本翻訳は委員会内部利用のためのものであり、委員会関係者以外の不適切な利用はこれを禁止するものなのである。

目次

アーキペラゴ 賛歌	1
第1章 南方の町で	3
第2章 緑の島々	31
第3章 名前を考えて	63
第4章 ストラナハン、またはメレガー	81

アーキペラゴ 賛歌

遙か三〇年の時を超え
洪積層より出でし
遠からぬ過去の化石の
骨を調べろ！ データを洗え！

消えゆく残り火の灰に埋もれ
肉のかけらも思い出さぬよう
死出虫どもの喰いあさる
マストドンより死せる者よ！

大皿の上に漂う
折れたる葦のごたまぜと
もっと平穏なシロモノ
さらに大きめの連中

進化のなれそめを知り
織り姫星より高い星を
もっと最初の岩のペテロを
まださほど空でないオメガを知る奴ら

血走った目の異教徒が
封じたふたを解き放った者
奴らは古代の金羊毛皮を探し
有り難いことに発見してしまった

「勝利」が汚点となる以前

そして、裏声のコーラスが
(スローガンや御託宣で)
不平をあげる以前には
ピグミー族を知らなかった連中

捨て牌も読めず
神さんを退屈な愛人とも思えず
山のごとき罪をも隠す
「愛」なるスローガンをも使わず

死んだ者あり、終わった者あり
全きものを求める奇妙な連中も
(英雄なみに減ったが)未だいる
あんたらよりちったあマシな連中も

R. A. ラファティ

第1章

南方の町で

一、

こういう一切合切が始まったのは、とある南方の町でのこと、朝九時という世界が創られたのと同時刻からなのである。もともとの日には未だ人間の生まれていない、木曜という日のことだった。

ま、こうした末日には道行く人々も少なく、酒場にもごく少数しかいなかった。でもビールはあった（大麦とホップは三日目に作られていたから）し、それに年輩の人々なら覚えている通り、世界最初の何週間と同じさわやかさを持った朝ではあった。疾風が雲を払いつつあって、舗装は濡れていた（世界が最初に創られたときは、雨の直後にようだったのだ）。

世界の最初の男が最初のビールを飲んでいて、かれはフィネガン（名としてではなく、実存として）で、バーの鏡で自分を映してみた。初の顔を初めて見たわけで、かれの外見はこんな具合：バナナみたいな鼻と、ほっぺたからこめかみにかけての長いぴくぴくする筋肉、落ち着かない口元。陰気でやせぎすで、雄牛の一年仔みたい。目が赤くなっている、前日だの前夜だのがあらましかば、ここ数日は嵐続きだったのかと思わせる。半分よりちょっと多めにイタリア人で、半分よりちょっと多めにアイリッシュだ。別のお話でかれに相当するアダムがそうだったように。

精神は明晰だが型にはまっていなかった。根無し草で背教者。この一瞬前まではエデンの園にいたのだ。今、ドリンクから目をあげる。と、楽園は失せていて、かれは世界のまっただなか。新品の目でこの世界を見渡して、自分が果たしてここに居所を見つけられるのかしら、と悩むフィネガンである。

でも、一人じゃなかった。ヴィンセントという相棒がいた。そいつは根無し草でも背教者でもなかったけれど。その精神はフィネガンほど明晰でも深くもなかったし、型にはまっていた。楽園は知らない。ヴィンセントはこの世に生まれ、したがっていつでも居

所があるのだ。

「In principio, creavit Deus masculinum et feminum」とフィネガン。「というのを翻訳すると、神は初の仲間を男と女として作った、と」

「でも最初期のお話ってのはいつも『野郎が二人、酒場においてさ』なんだぜ」とヴィンセントが反論した。「ラテン語知ってりゃラテン語で言うんだけど」

「この二説で折り合いをつけるわけにはいかないの、困ったな。だけど実際のところ、毎度世界が始まるたびに、酒場の二人の若者から始まるからね。他のことは全部その後の話なんだ」とフィネガン。

朝食前のビールは、その日一日ツキを呼ぶ。トゥーイーズ、トゥーツ、K.B. ラガー、楽園にあったのと同じビール。アレも全部夢だったわけじゃないんだ。若者たちはその酒場を後にしたが、別に酒場すべてを後にしたわけじゃない。訪れるべき酒場はまだまだあった。

それをハシゴして、キング図・クロスからダーリングハーストをずうっとぬけて、坂を下ってダウントウンに出た。朝の建物や路電の輝き（路電は五日目に創られた）には、いつも変わらず新鮮な何かがある。

一、

彼らは競馬場にいた。女の子たちがひっぱってきたのだ。ランウィックに行きましょ、と言われて、フィネガンはそれが競馬場とは夢にもおもわず、また別の酒場か、と思ったのだが。

「馬の走り方が逆向きだぞ」とはその彼の言だ。「時計まわりに走ってるじゃない。アメリカでは反時計まわりに走るのに。ハンスなら合理的に説明してくれるよ。あいつは何でも合理的に説明できるんだ」

「いや、こいつは不合理だよ」とハンス。「自然の力に反して走ってる。なんだって両方の半球で同じ間違いをするんだろう」

「え、何が？」マリーが尋ねた。

「コリオリの力だよ。自然の力の一つ。赤道の北では、何でも時計まわりなんだ。水の渦や竜巻きとか、放物運動の軌跡とかさ。高いところから物を落とすと、垂直には落ちないで、わずかに曲線を描いて落ちるし、ジャングルや荒地で迷った人が、同じところを時計まわりにグルグルまわっちゃうのも、別に右足が左足より短いせいじゃなくて（普通センチ単位で同じくらいの長さなんだ）地球に作用しているコリオリの力のせいなんだ。で、ここみたく赤道の南だと、全部逆になって、何でも逆向きにまわるはずなんだ。だけ

ど、世界の両半球で、馬はこの普遍的な力に逆らっちゃうんだもんな。もうわけわからんよ」そこはなかなか良い馬場で、彼らが見たうちで最高のところだった。人出も二万人くらいあったようだ。その中には豪州人の兵隊のトム・シャイアとフレディー・キャッスルがいた。彼らとはすぐ仲良くなった。一緒にビールを飲んで、インフィールドの芝生にすわり、馬が、パカパカ走るのを眺めていた。

ここで数時間分記録がぬけている。次のところでは、もうレースはかなり前に終わっていた。女の子たちは、そろそろ飲むのを切り上げて夕食に行こうといいだしていた。

「なんで豪州人ってみんな左手で食べるの？」フィネガンが尋ねた。

「別に左手で食べちゃいけないさ」トム・シャイアが弁解する。「ちゃんと両手使って食べる。君たちと同じだよ。ただ、君たちの方はしょっちゅう手をかえるだろう。肉を切る時は右手にナイフで左手にフォークを持ってるけどそれを食べる段になって手をかかえて、フォークを右手に持って食べるじゃない。僕たちは、ナイフは常に右でフォークは必ず左手に持ってるだけだよ。作法通りにね」

「どーだっていいじゃん」とフレディー。「指はフォークより先にあったんだし」

「よくそういうけどさあ」ハンスが出てきた。「それはちがうよ。指より古いナイフやフォークやスプーンってちゃんとあるもの。古代のテーブルフォークは流石にないけれど、二また、三またのやつがあるし、先が分かれていないけどこんな突きさして食べるものがあつたし（最初期の食食用フォークだ） こういうのにはちゃんと古代モノがある。でも考古学者に聞けばすぐわかるけど、古代の指なんてのは、まるで発見例がないんだぜ。よって以上より明らかなように、フォークは指より先にあつた」

「指がなくてどーやってフォークなんかつくんの？」ロイが聞いた。

「知るか。最初のフォークより古い指が出て来ない限りは、話にならないね。でも指なんか出て来ないもん。出て来るのはアゴの骨や頭がい骨や腰骨ばっかじゃん。僕だって、フォークが腰より先にあつたとは言わないさ」

「フォークを発明したのはイタリア人だよ」フィネガンはまだこんなことを言っている。

「オリーブをピンから出すんで発明したんだ。オリーブも僕たちの発明だよ。ピンも」だが、ヴィンセントの説だと、ピンはアイリッシュの発明だそうだ。

夕食後、ガヤガヤと座っている八人の見てくれはそれぞれこんな感じだった。

ヴィンセントはハンサムだったが、しょせん、アイリッシュにしては、という枠内で、である。彼の頭は、アイリッシュの顔をつくっているなにがしかを冗談でくっつけ合わせたようなものだった。眉はひんまがっているし、口元も、すこし落ち着きがなさすぎる。でも、大方のアイリッシュよりはましな顔だったし、自分でもその顔をおもしろがっていた。

ハンスは陽気なドイツっ子で、たくましかった。皿に乗って出てきたのが彼のくびだったら、サロメも持ち上げるのに苦労しただろう。彼の青い目は人の心を読むかのようなだったが、いつもひいき目に読んでしまうのは問題だった。知らない人が彼を見ると、おい、あいつは何やらVIPじゃないか、などとひじでつつきあったりすることもあるが、こんな若僧がVIPのわけはない。もちろん重要人物なのは事実だが、彼らの考えたように重要なのではないし、今、名前が売れているのでもない。

トム・シャイアは大柄で美男。フレディー・キャッスルはもっと小柄で赤ら顔。まごう方なくオーストラリア人だった。ムーア人の格好をさせて砂漠用ローブをかぶせ、砂嵐の中、二キロメートル向うから、かすかに見えるくらいにしても、一発でオーストラリア人と知れるだろう。彼らには烙印が押されていて、一生消えることはないのだ。今から三万年の後、二人の大腿骨がなんかがトルキスタンで発見されたとしたら、見つけた学者先生は、ビックリするだろうけれど、それでもちゃんとわかるはずだ。「一体全体こんなオーストラリア人の大腿骨がトルキスタンくんだりで何してるんだ？」といった具合に。

マーガレット・マーフィーは、大人の格好をしてみた女の子ってところか。キョロキョロとグループを見渡している。ロイ・ラーキンは、言うなればピンクの雲だ。

マリーについては二通りの見方があった。他の六人の目を通してみるか...あるいはハンスの目を通して見るか。六人にとっては彼女はポチャポチャした娘でラフな感じで、口のきき方がきつくて、内輪うけの冗談ばかりで、それと目にかかった髪を手の甲でかきあげる癖のある娘だった。ハンスはもう違う見方をするようになっていたのである。

フィネガンは、近間で眺められると分が悪かった。夜目、遠目、後側から見てやれば、彼は完璧なのだ。若いマーキュリーの軽妙さと優雅さを持ち、食べすぎ飲みすぎでゲップが出る以前のディオニソスの無軌道な強さと怖るべき敏捷性を備え、古き秩序に立ち向かったその朝のプロメテウスのような心動かす何かを有するのである。

しかし、近くに寄って観察してやると、彼はそんな天使ではなく、鬼子のような顔だ。冗談みたいな顔でまん中に角状の鼻がニョッキリ生えている。今にもそのお面をはずして本当の顔を見せてくれるような気がするが、いつもその顔だ。

彼の声もちょっと離れて内容が聞きとれないくらいで聞く分には、ほとんど魔術的とも言えるべき響きとリズムがあった。だが、近くでしっかり聞いてやると、これもグロテスクなことおびただしい。フィネガンの喋る方言というのが、世界のいかなる土地でも使われていないような、彼の故郷の町ですら使われていない代物だからである。ニューオーリンズには、OIの音をブルックリン訛りより派手に発音する地区がある。古いシャツの切れはしを寄せ集めたみたいな、海岸地帯訛りのアイルランド語がある。隣の通りの人間ですら聞きとれないようなリトル・イタリアの訛りというものもある。聞く人をただただ

アゼンとさせる、ルイジアナ系フランス語都市流入型浮動変型。大ナマズが使う言葉で、他の小ナマズに理解不能、という発話形態も。フィネガンの話し方は、この手のヤツを全部いっしょくたにしたようなものだった。しかも、さらに、彼独自の無気味なものが加わって、それを耳にした人間は誰一人として未だ立ち直れた者がいないというほどのものに仕上がっている。「ええ、あなたが何言ってるのか、ぜんぜんわかんないわ、フィネガン」などとマーガレットが言う。「善処してみるのも面白いけど」

「そのオーストラリア訛りで、人の話し方にケチをつけられると思っているの？」フィネガンも反論する。

コーヒーの後、マーガレットとロイは電車で席をとってあって、ヴィンセントとフィネガンが二人を駅まで送っていった。

トムとフレディーは、まだ酒保の開いている兵舎にかえった。

そして、ハンス・シュルツとマリー・モナハンは、波止場のそばのコーヒーハウスへと向かった。

三、

二人は長いこと、コーヒーにブランデーを加えながら飲んでいた。

「なんであたし、こんなにコーヒー好きなんだろ」とマリー。「由緒正しい豪州人なら紅茶党のはずなのに。イギリス人と支那人とロシア人は紅茶派なのね。アラブとヤンキーとラテン・アメリカ人はコーヒー。ね、ハンス、イギリス人と支那人ってすごく似てるの知ってる？」

「ぼくにも区別がつかないくらいだ」

「アラブとヤンキーも同じくらい似てるわ。両方とも経典の民だけどインテリ層は無神論者。それぞれ、しょもない理由でアルコールを嫌ってる。平地の住人やヤクザとスラムの子供もそっくり」

「コーヒーでキリスト教徒を増やしたのがクレメント 世だよ」とハンス。「彼が勅許を与えるまで、コーヒーはヨーロッパでは異教徒の飲み物だったからさ。これには反対もあって、その理由はコーヒーが非アルコール性飲料だからってことだった。社会に対してアルコールと同じ影響を与えるのに、許可したら責任は回避させることになってしまふからってことらしい。ほら、コーヒーは飲みながら何時間でもボーッとされてるし、泥酔して家までかついでいってもらわなきゃならないようなこともないから。だから、コーヒーは怠惰をもたらすものとして酒より害が大きいわけだ。マリー、この街には長いの？」

「百と五十六年ばかりね」

「きみがそんな年寄りとは思わなかった」

「モナハン家が、っていうつもりで言ったのよ、ラーキン家やマーフィー家もかなり古い一族だわね。あたしたちは古いアイリッシュがかなり混じってるの。でも、なんかそれじゃ頼りなくて。だから今度ダブリンかコークにいったら亭主を捜してみようかなって思ってたんだけど。あなたを捕まえるのもいいわね」

実際、もう捕まえていた。ハンスにはマリーよりもずっと前にわかっていたことである。彼はあらゆることを誰よりも先に知る男なのだ。たとえそれが自分がらみのことであっても。

救世軍のサリーが店にやってきた。しばらくして二人に目をつけると、おなじテーブルに腰をおろした。人なつっこい娘だったし、賛美歌弾き語りのギターにぶらさげてあったコップをまわしたとき、寄付したのがこの二人だけだったのだ。

「イエス・キリストが訪れる」ですと。

「もう帰っちゃったわよ」とマリー。

「ええ、でもまた来るのよ。備えよ、神の再臨に備えよ。あたし、サリー。我々救世軍は、神の再降臨を説き、信仰告白を行っております。裁きの日は近い。コーヒー、ええ、いただくわ。あなたたちローマ・カソリックね、そのケーハクさから見て。でも、親切にしてくれたのはあなたたちだけだったし。十二使徒たちも、ケーハクな不信心者たちに親切に話かけられたり、泊まっていくように勧められたりしたにちがいないわ。連中だってそういう時に、日が暮れて宿の当てもなければ、それほど邪険にはしなかったはずよ。ああ、結構。ブランデーは入れないで。酒は悪魔の飲み物よ。我々救世軍はあらゆる教会を避けるのです。なんとなれば、教会は畏だからです。あんたたちのローマ・カソリック教会なんて一番エグい畏じゃない。一番あたしたちの話を聞いてくれないもの。うちはおたくを知ってるけど、おたくらはうちをしらないのよ」

“ Je congnois le faulte des Boems;

Je congnois le povoir de Romme, ” マリーがおごそかな口調で引用した。

「あたしも語学はできるほうなのよ、当然のことながら」とサリー。「うちはローマの力をちゃんと知ってるわ。でも、おたくらがボヘミアの異端をわかっているととは思えないわ。そもそも誰が異端者なのかしら。おたくら？ かれら？ それともあたしたち？ 島に住んでた人々の話を御存じかしら」

「ああ、あの、島のほうが本土なんだって主張した連中のことだろう」

「ええ。それがおたくら、かもね」

サリーは見てくれも声もおかしな娘だった。キャッチフレーズだけではなしをするよう

なところもあったが、ひらめきのいいコで、ホンモノだった。三人はながいこと話こんでいた。彼らは死ぬまで、そしてその後もお互いにかかずらあうことになる。

「外は雨よ、サリー」夜も遅くなった頃マリーが言った。「ほら、あたしのとこの鍵よ。うちに泊まってらっしゃいな。住所はホルダーに書いてあるから」

「いいえ、マリー。なんてケーハクなコたちなのかしら。慈善でそんなことしてほしくないわ。愛がなくっちゃ」(当然サリーの言、サリーの声、まるでカラスのわめき声)

「あなたってホントにごっちゃになってんのね」マリーが言ってやった。「慈善というのは、もともとラテン語で愛のことなのよ。これぬきの愛はありえないの。さ、あたしの部屋に行つて。じっとしてんのよ。鍵はあけといて。あたしは遅くなるから」

「いやよ。あなたたちが一緒に帰ってきたら困るじゃない。それで不道德なことがあつたりすると」

「一緒に帰つたりしませんつたら。逢い引きもないつてば」

「わかつたわ。それじゃお先に。あんまり遅くなるんじゃないわよ。世間で言うがごとく、汝、善良たり得ぬならばせめて注意深くあれ」

「サリー、きみてダメな説教師だなあ。逆だよ。注意深くできぬなら、せめて善良であれつて。悪人は注意深くなけりゃ勤まらぬ」

「何からの引用だか忘れちゃつたみたい」

「フィネガンの知」

「聖書じゃないのはわかつてたんだけどね。おやすみ、マリー。おやすみ、シュルツさん。えっと、通り名は？」

「ハンシェン」

「おやすみ、ハンシェン」

その後、何年もたつて、ハンスは救世サリーの手紙を朗読してもらつた機会があつた。信じ難かつた。よくよく考えてみるまでウソとしか思えなかつた。紙に書いてみると、サリーの言葉は何の変哲もないのだ。ではあの音は？ どうやつたらあんな音が？ しかもこれはハンスがマリーにつかまつて、オーストラリアなまでに完全に慣れてからのことである。サリーの方言はずつと超えたものだつた。地軸の南端のさらに南にあるような代物だつた。

「で、ハンシェン、とりあえずはどうなさるおつもり？」

“ Ich weiss nicht wass Ich will,

Ich moecht am liebsten sterben - ”

「いいえ、あなたはまだ死ぬには早いわ。それにしてもあたしのオランダ小僧が詩をやるとはね」

「おもしろいじゃん。フィネガンも好きだよ。耳が腐れ落ちるまでダンテを暗唱してくれるさ。ヴィンセントはゲール人の滅亡をやるし、ツイマンスキーも詩がすきだっけ」

「その人に会えば、ダーティー・ファイブのうち四人にあったことになるわ。そうしたら、この世に残る驚異はただ一つね。その人、この街にいるんでしょ。ちゃんと捜し出しにくるのよ」

「ケイシーなら大丈夫、見つかるさ。きみはじっとしてればいい。きみはぼくのもんだ」

その晩、二人は子供時代の話で語り明かした。オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズと、アメリカのウィスコンシンでは、夏の田舎の子供生活はずいぶん似ているものだ。いつか、まだ二人の時間があるうちに馬を二頭手に入れて、一日中田舎を走りまわろう。

夜勤の男は、もうそれ以上コーヒーをいれたがらなかったし、早番の男もあと一時間くらいは出勤してこないはずだった。まだ雨が降っていたが、二人がその中を歩いてゆくうちに降りも軽くなってきた。ミサのため、二人はセント・メアリーズに寄った。

四、

ヴィンセントとフィネガンが、ロイとマーガレットを駅まで送ってやった頃には、酒場はどこも閉まっていた。夜の訪れとともに町には覆いがかかり、もはや一杯のビールすら手には入らなかったのである。そこで二人は兵舎のトムとフレディーに電話をかけ、この状況について相談した。

こうして二人は陰謀の犠牲となる。トムとフレディーが二人を呼び出した場所は、兵舎ではなく、およそまともなところとは言い難い、二ブロック離れたうす暗い街角で、しかもずいぶんまわり道をしてそこにに行けと言われたのだ。その指示のややこしいこと、下手な作戦指令などメではない。

「灯火をもらさぬこと。音も一切たてるな」とトム。「静かに行かねばならない。君たちの命がかかっている。フレディー、おまえからも言ってやれ」

「命がかかっている」と電話越しにフレディー・キャッスルの不機嫌な声が出た。

フィネガンとヴィンセントは、言われた通りに市街電車に乗り、それから裏通りを下り、道を横切って廻れ右の後、別の裏通りを通過して市街電車の駅から一ブロックのところに戻ってきた。注意深く指示を守ったのだ。

「連中、ついてきてるのかなあ」フィネガンがぼやいた。「これじゃ役所のたらいまわしだ」

「どーせ面白がっているんだろうけど、待つしかないな」ヴィンセントが答えた。

トムとフレディーは、大きな包みを二つ三つ抱えて暗がりの中から現れた。静かに、

と合図してみせて、話すのも何か畏れ多いことを口にする時のように、密やかな調子だった。

「刻限後にビールが手に入るのはうちの酒保だけだ」とトム。「そこで問題なのが、ヤンキーは御法度なんだ。前にヤンキーが押しかけたときはちょっと凄いことになったぜ」

「じゃあ、俺たちはダメか」ヴィンセントの判断は合理的といえる。

「いや。変装してもらおう」とフレディー。彼は包みをあけると、冬物の上着と、豪州軍帽を取り出した。道の玉石まで耳をたてている中、彼らが震えていたのも無理はない。

「これを着て」とトム・シャイア。

「上着はしっかりボタンをかけて、カラーもあげとけ。あと、帽子をまぶかにかぶって。そうすれば誰にも気付かれない」

「冗談キツイぜ、兄チャン。こんな暑い夜だつてのに！」ヴィンセントは抗議した。「みんな夏服着てるんだぜ。気温も三十度近い。かえって人目につくじゃないか」

「仕方ないさ」とフレディー。「夏服でどうやって変装できる？ 無理だろう。もぐりこむにはこれしかない。ホレ、景気づけに一杯。ストレートが何だつて？ ああ、きつすぎて涙が出るのか。じゃ、せりふの練習をちょっとやろう。そしたら、迫る危険におびえながらビールを飲りに行こう」

「やっぱり今晚はウィスキーにしておいて、ビールは明日にしよう」フィネガンは言った。

だがトム・シャイアは宣言した。「いや。おまえがビールを好きだと言う以上、何と少しでもビールを手にいれる。そのためには、お前たちに豪州人のふりをさせて押し込むしかない。ヴィンセント、そんな頭じゃ一発でバレちまう。そんな髪 of 豪州人がいるものか。だけど、ついてえるな。丁度バリカンを持ってる」

「勝手にしろ」

トム・シャイアは、ヴィンセントの髪を実に大雑把かつ派手に刈ってやり、切られた髪が歩道にうずたかく積み上がった。トムというのは実に大雑把かつ巨大な男であり、人サマのためと称してこういうことをするのが好きなのだ。

「そうだな、あんまり上手い散髪ではなかったな」少々間をおいて、トムが言った。

「やった本人が言うんだから、間違いない。どうも、圧倒的に床屋むきじゃない人間というものもいるみたいだな。ちっとも豪州人らしくならなかった。けど、少なくともヤンキーらしくなくなったのは確かだな。要するに、それが肝心なんだ。こないだうちの酒保に押しかけたヤンキーがどうなったか、敢えて口にしないでおくよ。それなりの危険はあるということだ。用心しすぎることはない」

「最悪の場合、今夜の当直がああブッシュマスターということもある。うちの部隊にあの手のサディストが群をなしているのは不幸としか言いようがないけれど、なに、あの手

のはどこにだっているさ。さて、じゃフィネガン、お前が言語のつもりで使ってる、その雑音は忘れて、豪州人風に喋ってもらおう。『オレと連れにジョッキ二つ！』はい、言ってごらん」

「××××××××××！」完璧だった。

「すごい！」とトム。「素晴らしいよ、なあ、フレディー。豪州人そっくりだ。ヴィンス、喋るのは全部フィネガンにまかせろ。こいつは方言のツボを心得てる。演劇に手を出す気はないか？ ホラ、それじゃあ、まずキツイのを二～三杯やって。いったん汗をしっかりとかきはじめれば、その上着を着てても少しはましになるさ」

だが、その上着は暑苦しかった。だから、一行は苦労しいしい進んでいった。汗をかきはじめてが、ちっともましにならなかった。着込んだ上着の下は、夏の夜の暑さで、かゆくてバタバタと不快だった。そうやってゴワゴワに着ぶくれしたまま、彼らはびきっちょに裏手の柵を乗り越えると、軍隊でもお目にかかれなかったほど困難で危険なコースを横切った。二人とも、服は裂け、出血している。ずっと装備の軽いトムやフレディーでさえ苦労していた。試練であった。が、彼らは兵舎に、そして酒保にたどりついたのである。

当直はあのブッシュマスターで、彼はゴリラに似ていた。ただし、ゴリラよりも巨大かつ怖ろしげで、ゲジ眉、色黒、そのうえずっと凶暴だ。

「いよう、アメ公、大いに楽しんでくれよ」と彼。「今日、街でお前たちを見かけたぜ。そんな暑い上着なんて着てどうした？」

その時、ブッシュマスターの目にフレディーの合図が目にとまり、彼は自分の冗談が不発であったことを悟った。だが、それで救われた。彼らはフィネガンとヴィンセントの酔い加減を甘く見すぎていたのだ。四人の友は、協議のために引っ込んだ。

「奴は俺たちがアメ公だって知ってるじゃないか」と、髪の高い新しいヴィンセントが言った。「それが、『大いに楽しんでくれ』だって。お前たちの言ってた何だかんだは一体何だったんだ？」

「いやいや、あいつはずる賢いからな」と、トム。「カマをかけてるんだ。お前が黙っていて、本当はアメ公だってことをバラさなかったのはよかった。さもなきゃ奴はお前のどぶえに喰らいついていたぞ。お前のすぐ後ろの床のシミは、いくら洗っても落ちないんだ。前に押し込んだアメ公の名残りが、そのシミだけだとは言わんが、それがほとんどなのは確かだ。それじゃあブッシュマスター軍曹のところまで行って、さっきのリハーサルみたいに言うんだ。はやく行って、口をきいてこいよ、フィネガン。うまくだませよ」

その日はもうずいぶん飲んでいて、今では、何を聞かされても、もっともらしく思えるようになっていた。フィネガンは、カラーを一層高くあげると、軍帽をぐっとひきおろした。帽子は大きすぎて、彼の突出した鼻がなかったら肩までずり落ちていただろう。

「おい相棒、俺と連れにビール頼む」豪州訛りで、彼は勇敢に言った。

「お前たち、この部隊の所属か？」ブッシュマスター軍曹が尋ねた。

「ああそうだ。俺と連れと、二人ともこの部隊」

「部隊にいるのはたった二十七人で、全員知ってると思ったが」とブッシュマスター。

「それじゃ、そこにサインしてビール伝票を切って」

フィネガンはサインした。それを読みもせず。こうして彼は網にかけられた。彼がサインしたのは、登録簿ではなかった。それは、ヤンキーはビール飲みではオーストラリア人にまるでかなわなくて、ヤンキーはその他何を飲ませても、何をやらせてもオーストラリア人の足元にも及ばないと宣言してある奇妙な証書だった。ヤンキーはケツが青いとか、ヤンキーはあんなものやこんなことまですると、わいせつな言葉を淡々と記したくんだりもあった。長い証書で、(急いで作成したのに)ほぼすべてをカバーしていた。書かせたのはトム・シャイアだが、天才の筆になるものだった。

フィネガンがサインしたのは、そんな文書であり、彼は自分の国を裏切ったのである。この証書は現在もある連隊の所有下にあり、豪州反共クラブが管理している。このクラブのメンバーは若くて、トム・シャイアやフレディー・キャッスルの面識はなかったが、それでもこの宣誓書を大事にしている。

とにかく、フィネガンはビールを無表情のまま取りにいった。

「そりゃ何だ？」バーテンが訊いた。

「ビール伝票。俺がここでビールを買えることを示すんだ。登録簿にサインして、ビールが買えるようにブッシュマスター軍曹が伝票をくれた」

「ビール伝票なんて聞いたこともないぜ、アメ公。はめられたんだよ。ビールを買うにはザックがあればいいのさ」

「ザックなんて知らんぞ」

「六ペンスのことだ」

「堂々たるもんだぜ、お前は」ビールを持って戻ったフィネガンに、フレディーが言った。「だが、まだ危険は大きい。前にもぐりこんでつかまったヤンキーは.....悲惨だった！」

「悲惨」と、トム・シャイア。

四人は機械室に向かったテーブルについた。とても暑かった。他に空いてるテーブルはあったが、どれも彼らの特別な目的には不適當だった。

「ちょっとカラーを下ろすわけにはいかないのか？」ヴィンセントは訊ねた。

「命と引き換えになるぜ」フレディーが答えた。「いいからどんどん飲め。俺たちが切らさないようにしとくから。死ぬ時は、口の端にビールの泡をつけていきたいものだよ」

ジョッキで何杯か空けると、彼らは今度は英クォート入り大ジョッキで飲みはじめた。

英クォートジョッキは、それだけですでに帝国である。総重量三十九オンスは、最後の一口で一発くらったようだ。そのうえ、連中は一日中酒場をハシゴしていた。だから、各人が二杯ずつ空けた頃には頭の中がグルグルまわり、寝てしまうという怖るべき危険にさらされていた。

「おい、みんな」フレディーが警告した。「緊張警報だ。危険がそこまで迫っているぞ。来るべきものが来たときの心の準備をしておけよ」

ブッシュマスターが、彼らのほうに向かって来るところだったのだ。だが、でかいブッシュマスターにも弱点はあった。米・豪両陸軍のなかで最も凶悪に見える軍曹ではあったが、罪のない人間が苦しむのを見ごしにできない男だったのだ。そして、親切な人の常として、物事をうやむやにしておくのが嫌いだった。

「その暑苦しいものを脱げばずっと楽になるぜ」と彼。「それと、お前のかぶっているのは俺の帽子だ、フィネガン。お前のポンチョにしてもいいくらい大きな帽子だが、できれば返してくれ」

「もうダメだ」フレディーが囁いた。1

「だけど図太くゴマかせ。でないとしきにお前の血が飛び散る。何か言えたら」

そこでフィネガンは、巨大なブッシュマスターに向かって言った。「もしこれを脱いだら、僕たちがヤンキーなのがバレるだろう。そうなったら僕たちはおしまいなもの」

「俺が思うに、もうお前らはおしまいだぜ」とブッシュマスター。「まだネンネだな、坊や。それだけナリはでかいのにな。お前たちの水準は超えているが。俺の三つの妹だって、お前たちに三倍のハンデをやってもお前たちを飲み負かせるぜ。所詮、ヤンキーにはビールが扱いきれんのだ。ヤギのオッパイにでも乗り換えたらどうだ？」

「俺たちは、この世の始めから飲んでるんだぜ」とヴィンセント。

「今日初めて、だろうが。お前らの仲間で、ちょっとでもいけるヤンキーがいるかよ」

「チャンピオンがいるぜ、ブッシュマスター。俺たちにはチャンピオンがついているんだ」

「何のチャンピオンだよ、そいつは。この俺が、ヘビー級世界チャンピオンだぜ。五十クイッドかき集められるんなら、かけてもいい」

「千クイッドだ」とフィネガン。「ところでクイッドって、いくらなんだ？」

「一ポンドだ。それに、無駄使いはよせ。五十クイッド用意して、明日正午、ハーバーハウスでそいつをオレと勝負させられるか？」

「よし。掛け金は出せる」とフィネガン。

「英連邦ルール」とジョー・ブッシュマスターが唱えた。「正午に試合開始。二十分でクォート空けるべし。いずれかが二時間で六杯片付けられなかったときは、試合無効。こ

れはつまり、お前らが、完全に格が違うのを知ったときに恥をかかずにすむようにってことだ。そのあとは、選手が時計とビールに応じられる限り続く。トムとフレディーは審判だ。両サイドに信用されてるからな。俺の対戦相手の名前は？」

「シュルツ。ジョン・シュルツ」

これを聞いて、ブッシュマスターは蒼くなった。ハンスのことは聞いていたからだ。だが、それも一瞬のことだった。

「負けやしないぜ。ドイツ野郎なんか、前に何度も潰してるぜ」

「あのさあ」と、タクシーに押し込められながらフィネガンが言った。

「あの軍帽は手放したくなかったな。あの帽子をかぶっていると、時には故郷に帰ったような気持ちになったんだ」

五、

「 - だがその前に、私はめいめいに、朝にエールを飲むことを禁ずる呪いでもかけられているのか尋ねた」 - ベロック

ハンスが家に戻った頃、すでに陽は昇っており、ヴィンセントとフィネガンは寝ていた。数時間の平安は得られよう。彼は寢床に入った。アルコール入りのコーヒーと夜ふかして、疲れて少し酔っていた。自分に満足、世界に満足、街に満足、女王のごときマリー・モナハンに満足。人が、軟膏にたかる蠅（玉にキズ、の意）もない、完璧に近い平安の中にあるというのは、そうそうあることではない。

「それに軟膏に蠅がいたらなぜいけないの？」マリーが彼の頭の中で尋ねているようだった。

「蠅は軟膏が好きなのよ。軟膏は蠅にとってもいいし、蠅の身体を軟らかくするの」

翌日、二人は桃源でデートの予定だった。翌日なのか、すでに今日なのか自信はなかった。だが急ぐことはない。どのみち午前中には着けはしないのだ。

「つまり、ホラチウスも言うように、桃源郷ではいつも午後なのよ」また彼の頭の中で喋るマリーである。

「ホラチウスはそんなこと言わなかったぞ」ハンスは遠い意識の中で文句をつけずにはいられなかった。

「あたしのおじさんのホラチウス・ヒッゲンボサムって人はそう言ったわ」これがマリーの口のきき方だった。

マリーと共に桃源郷にあって、時は止まる！そして、南のここ、この場所こそ、まさに桃源そのものなのかもしれない。陶淵明が描いたよりも遠く、ソロモン王とヒラム王の

家臣が旅の三年を過ごしたというオフルよりもなお遠いのがこの場所だ。ここは世界で最も遙かな地点であり、古の伝説が追放されてくる対蹠地である。この南の地はグリフォンやドラゴンの故郷なのだった。

牙をむいてにやにやしていたクローム色のドラゴンが、突然馬鹿にしたようなガランガランという音で食道を波うたせてけたたましく吠えはじめ、ハンスは起きあがってそいつを締めあげた。しかし、湧き上がりかけた怒りはすぐに失せ、彼は笑ってアラーム・レバーを放してやった。だが、もうそいつは弱々しくカタンコトンと鳴るだけだった。

「そんなんじゃ誰も起こせないぜ。本物の時計らしく自己主張しろよ」ハンスは説いた。ヴィンセントとフィネガンはまだ寝ている。

「何ていぎたない連中だ。早起きしたい用でもあったのかね？」

ここで一騒動あった。

それからフィネガンが言った。「君を起こしてやろうと思って、それで早起きするつもりだったんだ。君にコンテストに出てもらうことになって、それで賭けを成立させるのであと君の側に三十ポンド要るんだけど、三十ポンドある？」

「ああ。何のコンテスト？」

「ビール飲みくらベコンテストで、相手はジョー・ブッシュマスター。世界ヘビー級チャンピオン・タイトルマッチなんだ。奴は君より百ポンドは体重があるぜ。まるでゴリラだ」

「僕より百ポンドもある人間がいるものか。ヘンリーだってそんなにない。それに僕とビールで張り合えるゴリラなんて五匹に一匹もないよ」

「これからトムとフレディーに会って、奴がどんなトレーニングをしてるか調べて、あとオッズの具合も聞こう。どう考えてもお前に勝ち目があるとは思えないけどなあ。本当に三十ポンド持ってるな？」

「もちろん。賭けよう」

一行はトムとフレディーに会い、朝食をとった。ハンスは何も飲み食いすべきではない、というのが本人を除いた全員の考えだった。ところが彼はステーキと卵と、さらに(ヴィンセントに言わせると、おぞけを震うことには)ビールを大ジョッキで空けてしまった。

「ブッシュマスターは試合開始まではぜんぜん飲み食いしないんだぜ」とトム・シャイア。「ゆうべはきついトレーニングで、今朝もジムに三時間こもってる。コンテストまでに、少なくとも二キロは汗を出すっていうのに」だがハンスは聞き入れなかった。「飲みくらべに勝つには清い心と小ずるい頭が何より。有難いことに、僕には両方ある」そして、街をうろつくと、彼は別のパブに入ってビールを頼んだ。

「誰か、あいつを止めるんだ！」フィネガンが叫んだ。「金と国家の名誉がパァになる！」
「いや、これはトレーニングなんだよ」とハンス。「ボクシングのトレーニングにはボクシングだろう。軽量級の連中とやってスピードをつけて、重量級の連中とやってパワーをきたえる。だから僕も、シャンディーギャフをショット・グラスで飲んで素早さを、それから黒ビールで強さをきたえる。そのあと強い奴と二、三回勝負して、本格的に体調を整えるんだ」

「しかしコンテストまであと二時間だけ」ヴィンセントが反論した。

「ならトレーニングを急がなきゃ」ハンスは断言した。

バーテンは、シラフでコンテストに出るのはよくないと同意した。ケイシー・ツイマンスキも同様の意見だった。ケイシーはちょうど一行に加わったところである。彼がダーティー5の四人目だった。

「シカゴにメルチセデック・デュフェイという人がいて、その人はこの手のことについて世界中の誰よりも詳しいんだ」ケイシーが語った。「東部に住んでいた頃、毎年ケルト・マラソンに参加していた人で、ただ彼はいつも日の出前にコースを一度走ってみて自分の調子確かめるようにしていた。それで、いつでも本番より日の出前の下見のほうでいいタイムを出してた。あるボクサーのマネージャーもやっていたけれど、そいつがまた試合の前の晩は必ず飲んだくれてケンカをするという奴だった。これも自分の調子確かめるためだったんだ」「試合には勝った？」フィネガンが尋ねた。

「いや、一度も。でも、前の晩のケンカでも全敗だった。つまり、理論が間違っていたのではなくて、そのボクサーがダメだったということが示された、と。デュフェイがマネージャーをやめたあと、彼は夫を射殺した未亡人と結婚したんだ」

ハンスはケイシーとビールを飲んで、その他のとりまきのいらいらだちをつのらせた。コモドールに行き、全員一杯ずつ飲った。胴元がもうコンテストのオッズを出していて、現在八対五でジョー・ブッシュンマスター優勢となっていた。一行は木船亭に行った。グリーン・ツリーに出かけ、赤堤燈に行った。この赤堤燈でジミー・ハンセンが彼らに追いついた。ジミーはコンテストの模様を記事にするよう契約した記者だった。

「私はあまりいい記者じゃない。軍を除隊になったとき、つえがないと歩けなかったのでこの粋なやつを買ったんです。そこで考えたのが、記者っていうのは肩書きとして粋な仕事じゃないかってね。犯罪記者の見習いとして雇ってもらいました。今日の記事は、本当はスポーツ面の担当ですが、スポーツ記者はこんな朝早くにはいないものでして。それにこれはスポーツというよりは社会面かもしれない。私は全部に埋め草を書いているんです」

社会面の一同はビナクルに店を変えた。スタインがそこで加わった。ダーティー5と知

り合いの米軍軍曹だった。

「あなたも報道関係者で？」ジミーが尋ねた。

「軍特務報道官です。なぜですか？何かネタでも？」

「別に、ただノアの洪水がひいて以来最大のイベントがあるだけです。世界チャンピオン・タイトルマッチですからね。南のライオン、ジョー・ブッシュマスター対ミルウォーキーの虎、ハンス・シュルツ！これはあなた、いけますよ。こいつに署名がA・スタインと入ったところを想像してごらん下さい。Aは何の略です？」

「アブサロム」とスタイン。「記事にしてみてもいいな。ここであるんですか？」

「真昼にハーバー・ハウスで。でもハンスは昼前にハイになるつもりのようすな」

スタインはケイシー・ツイマンスキーを捜し出した。二人は長いこと話しこみ、ケイシーはととも腹を立てた。また、恐がってもいた。彼はスタインと喋った後、いつでも恐ろしくなるのだ。これは謎だった。それからみんなはハーバー・ハウスへ向かい、そこでマリー・モナハンが加わった。これには多くの人がいい顔をしなかった。大きなコンテストでは選手のコーナーに女はいるべきじゃない。気が散ってしまう。かつて最強のチャンピオンの一人が、自分のコーナーに女がいたときに敗北を喫している。それさえなければ、それとまだ生きていたなら、今でも彼がチャンピオンだったかもしれない。

スタインは無理矢理司会の地位を獲得した。この米軍軍曹は、なぜか特務だった。軍のクラブで講演を行い、軍の新聞に物を書いていた。部隊から部隊へと渡り歩き、奇妙な連隊や旅団に出入りがあった。

しかし彼は有能で、ビールの飲みくらべにおける英連邦ルールの要点を直ちにつかんだ。実のところ、それはほとんど慣習法と常識の域を越えるものではない。彼の明晰な頭脳は一瞬のうちにすべてをマスターした。

多少の小細工があった。ブッシュマスターが、相手をいら立たせようとして、ギリギリの時刻まで姿を見せないという古い手を使ったのだ。少なくともハンスにいら立った様子は見えなかった。スタインは、非情にも雑談を鎮め、時間通りに事を開始させた。

彼は気取った開会を執り行った。選手たちは直ちにとりかかる。ブッシュマスターは、最初のジョッキを破壊的に、がぶ飲み二息で飲みほし、巨大な顔を手の甲でぬぐうとテーブルをたたいて次を催促した。そしてあたりを見廻すと、馬鹿にしたように悠然とニタついた。

ハンスは、この恐るべき対戦相手が眼中にないかのごとく、飲んでではマリーを見つめている。みんなは、マリーにハンスの邪魔にならぬような場所に座ってもらおうとしたが、ハンスは邪魔されたがっていた。彼は恋しているのだ。だが、自分の役目も心得ていた。ブッシュマスターがそれと気付かぬうちに、彼は一杯目を静かに終えて、二杯目もほとんど

ど飲み終わっていた。

「なに？ あれが二杯目か？」ブッシュマスターが尋ねた。「本当に？ 確かか？」

「二杯目だよ、ジョセフ。係数係が確認済だ」とスタイン。

「ああいう見事な飲みっぷりにはほれほれするね。乱れぬペース、あわてる様子もなく、静かに飲みほす。がぶ飲みして息切れする粗野な素人とは大ちがいだ」ヴィンセントがブッシュマスターをあおる。

ハンスは二杯目を終え、休む間もなく三杯目にかかっていた。ブッシュマスターは、二杯目も大きながぶ飲み二息で乾すと、三杯目を引きよせた。

「時間は？」彼が叫んだ。

「十九分をまわったところ。二人とも一杯分余裕がある」とスタイン。(註・二十分で一杯あけるルールです)

「こぼすのに注意しろよ。あいつ、ひじでグラスをゆらすのが二回あったぜ」

「我々は信頼すべき審査委員を擁している。こぼすのを監視する係もいる。君のほうこそ警告だぞ、ジョセフ。手の甲で口をぬぐうとき、君は水気を排出している可能性がある。ビールは飲むものであって、ぬぐい去るものではないぞ。それに審判(というのは、トムとフレディーのことだ)君たちは、実際にこぼした分と、ジョッキの外壁に凝結してテーブルにしたたる水蒸気との識別に注意するように。こぼれるところを目視確認する必要がある。ケイシー、今のジョセフの『グラスをゆらす』ってのは気に入ったよ。我々の先刻の会話に実にふさわしいフレーズだ」ケイシーはむっとりしていた。ハンスは三杯目を終えて、実に静かに四杯目を進めていたので、ブッシュマスターがまた口をはさんだ。

「カウントは？ 今のカウントは？」

「シュルツ、四杯目の途中、ブッシュマスター、三杯目」

ブッシュマスターは三杯目の残りを一気に空けようとしたが、失敗してせきこんだ。

「警告！ 過大な水分排出の恐れあり！」スタインが叫んだ。

ブッシュマスターは三杯目を終え、ゆっくりと四杯目にかかった。ハンスは手洗いに立った。審判と監視役に左右からつきそわれなくてはならなかった。これは、嘔吐その他の手段によって何物も口から排出されぬよう確認せよというスタインの指示によるものである。それでもなお、ハンスは大変すっきりした様子で戻ってくると、物凄い勢いで五杯目のジョッキにかかったので、ブッシュマスターの顔にはあからさまな驚愕の色が満ちた。

この時点で、胴元のほうではかなりの動きが見られた。今やオッズはハンスの側に傾いていたが、今賭けをかえる奴は阿呆だ、という人もまだ多かった。マリーは得意だった。

「あたしの可愛い赤目の恋人が！ それも連邦ルールでの初試合よ！」

ブッシュマスターが手洗いに行った。戻ると、彼はカウントを要求した。

「シュルツ、六杯目の途中、ブッシュマスター四杯目」

ブッシュマスターはパニック気味に四杯目を終え、五杯目に手をつけた。

「時間は？ 時間！」

「一時間と十六分」

「残り五分の警告がなかったぞ。あと五分で失格するところだったのに」

「いや、そうではなかった。四杯目は一時間十五分の数秒前に飲み終わられていた。従って、警告は不要だった。審査員は公正なのだよ。すべてが規定通り運ぶよう彼らが見ている」

ブッシュマスター側の応援席では、一口か二口、大きくがぶ飲みして少し時間をかせぐべきか、あるいはハンスの真似をしてすすべきかで論争がおきていた。

「すすむなら」と多少冷静な論者が述べた。

「君は相手の土俵で試合をしていることになる。相手の土俵では勝てぬぞ。己のスタイルを変えてはならぬ。君は生まれつきのガブ飲み屋なのだ。敵の土俵に上がるよりはガブ飲みで潰れるがよい」

「潰れるのはアメリカのドイツ野郎だぜ」とブッシュマスター。そして、五杯目の残り九分目ほどを一息でやっつけ、身震いしながら深く座りなおした。

「時間は？」

「一時間三十三分」

「今で終わったな」ヴィンセントが囁いた。

「もうビビってるし、じきにおりるぜ。もう一丁あおってやろう」と、彼はブッシュマスターの背中をどやした。

「選手を脅かさぬように！」スタインが命じた。

「凄いぞ、ジョー。今のは俺の見た中じゃ最大の一口だったぜ。ジョッキの八割方空けちまったもんな。ジョッキ一杯まるごと一息でってのは流石に無理だろうけど」

「無理なもんか」勢いこんでブッシュマスターが言った。「俺は年中やってる」

「そいつは拝ませてもらわなくちゃ。生きた人間にできる業とは思えんね。まさか六杯前で止めてノーゲームにする気じゃないだろう？」

「これまで試合を降りたためしはないぜ。あの赤目のヤンキーがベッドに運ばれても俺はまだいけるんだ」ブッシュマスターは、六杯目を丸ごと、大きな騒々しい一息のがぶ飲みで乾して、ハンスさえ感服させた。イギリスジョッキを一息で空けるといのは偉業である。かつて他所でそれが行われたという噂を耳にした者は多い。だが、現存する人間でそれを見たものはなかった。

一時間四十四分経過した。今やブッシュマスターが盛り返したかのように見え、オZZは彼の側に戻った。だが、賢い人間なら、それが白鳥の歌、というか、より正しくは瀕死のダチョウの大酒くらいであることがわかっただろう。

次の一時間は、ブッシュマスターは三回とも残り五分の警告を与えられた。三時間二十分の時点で、彼は残り十秒を宣告される。さらに三時間四十分、審判の一人が彼のジョッキに著しく残留する液体を指摘、これはスタインからの厳しい注意を招いた。

四時間目では二分に余裕があったものの、終わりは近かった。一方のハンス・シュルツは楽にリードを保ち、ブッシュマスターが十三杯目に手をつけたとき彼は十五杯目にかかっていた。

ブッシュマスターは果敢な男だ（果敢に死んだ、と応援団）、先祖のブルドッグのごとき闘志を持っている、と彼の応援団は言っていた（「ごとき」が余計だ、とフィネガン）が、今のブッシュマスターは情けないうすのろだった。四時間二十分で、彼のグラスにはまだ三センチのビールが残っていて、もう続けることができなかった。

大男は、しばし、手の中に顔をうずめたが、それからのっそりと立ち上がった。みんながお互いに握手をかわし、金の支払いや取り立てがはじまった。

「かくして両国の名誉は保たれたが、ビールで多少湿気たかな」とスタイン。

酒は全員に行きわたるだけあり、ハーバーハウスではそれだけでイベントだった。ブッシュマスターは自分を襲った惨劇の大きさにまだぼう然としているようで、小さなストック・グラスに黒ビールを、それもゆっくりと飲むだけだった。

これは、アルゴノートたちの一人に課せられた英雄的行為の一つだった。ハンスが負けでもしようものなら、全員が復讐の三女神たちに焼き滅ぼされていたことだろう。

これが英雄的行為？ これが？

そうそう。最初の英雄たちや初期の 아일랜드 の英雄たちの偉業とはこうしたものです。後の古典時代の事例に惑わされないように。そういうのは派生的なものです。

ダーティー5の四人とマリーとトムとフレディーは、またパブのはしごに出かけた。キャプテン・クックに行き、プレイミーの店、オランダ人の店、そしてコモドールに戻った。そのあと、連中はハンスを家に連れて帰って寝かせた。彼は疲れていたのだ。それから野郎どもはマリーと街にくり出していった。

六、

ハンスは恋をしていた。マリー・モナハンと恋愛中なのだ。大事な決定を下すのは遅い男だったが、これは速やかに確信された。

マリーは、他の人間にはこれというところのない娘かもしれない。人並みの、悪くはない顔だちをしていたが、髪が赤すぎるし、ソバカスも多すぎる。現代の基準からすればガチャポチャしているが、古典的基準では神々しい。ハンスの感覚は古典的だった。マリーの眼は緑色だったが、緑の眼も古典的だろうか。緑の眼の女神がいただけるか。ホメロスは色に関しては信用ならない。

「 - おじにホメロス・ホッハイマーって人がいて.....」と、ハンスの頭の中でマリーが喋っていた。「珍しいものを持っていたのに、色盲でそれがわからなかったの。紫色の牛を飼っていて、それが黒だと思ってたのね。十四才になるまで手元においてから肉屋さんに売ったわ。その肉屋は商談の成立した後でこう言ったのよ。『だんな、あんたは一財産ドブに捨てたようなもんだぜ。世界にたった一頭の紫の牛を二束三文で売っちゃうなんて。こいつなら百万でも売れるぜ』。実際、そうしたんですって」

だが、緑の眼の件をとりあえず解決しておこう。ギリシャ彫刻はもともと彩色されていたのに、この二千年ではげおちてしまったが、パウサニアスが見た時にはまだ色が残っていたという。そのうちのどれかが緑の眼だったと彼は書いていたっけ？ どうやって《緑》の眼と表現したのだろう？ クロロスと言わなかったのは確かだ。クロロスは淡い黄緑である。クロロスの眼を持った人などいない。プラジーンはきれいな緑だが、古典的なものだろうか？ マリーノ眼の色を表わすギリシャ語はなんだろう？ ローマ語ではシェレーノ、即ちジプシー・グリーンである。かつてフランス語でヴェアと呼ばれた色でもある。

ニコレットの瞳はヴェア、
何とかかんとか黄金の髪 -

と歌われた緑だったが、ヴェアはフランス精神の崩壊とともにヴェールとなり、最早トゥルバドゥールの緑ではなくなってしまった。無知な賢者たちは、ヴェアが銀鼠色だとさえ言う。

聖処女マリアは、初期フランダースの受胎告知画では赤毛で緑の眼に描かれていた。イブの前にいたとされるリリスは魔女なので、眼は緑色だ。すると、世の緑眼の女性には長子相続権があることになる。

緑の眼についての唯一の詩をかいたのはベロックだ。下らないテーマで、短々長格だの弱強五格だの、いろいろな形式であれだけつくられたびっこの詩の中で、たったこれだけ。

「 - バロック？ おじのピラックシー・ブラナガシのことよ。ミシシッピー下流のピラックシーで上陸したのでそう呼ばれていたんですって。おじさんの窓からは古い杭の頭が見えていて、おじさんはそれが自分の船のマストだと思っていたの。『慌てなくてもい

いさ。船はまだ停泊中だ』って。おばのゲートルードは、ピラックシー・インディアンの娘だったけど、おじに逆らわなかったわ。まだそうしているのよ。船をつかまえたことは一度もないの」桃源で待つハンスの頭の中で、マリーはこんなお喋りをしていた。やがて彼女の実体が現れると、彼の隣に腰をおろした。

「あらハンス、何してるの？」

「君の詩を書いているんだ。見るなよ。君は字余りだし、韻もふんでくれない。困った娘だよ」

「シェイクスピアも同じ悩みを抱えていたのよ、ハンス」

「抱えてるもんか」

「おじのシェイクス・ピアスンがそういう悩みを抱えていたのよ。いつも震えていたの、そう呼ばれていたの。そのおじさんが広告文案コンテストに応募して、かみタバコ会社主催で、五行詩を書くことになったわ。密造ウィスキーばかり飲んで、アル中でいつも震えてるひとで、こんな詩を書いたの。『ガッコで生まれた婆さんは - タバコかんで、老いぼれて - 』熱を入れすぎて、そこまで書いたらシェイクスおじさん、震えがきて密造ウィスキーを飲みに行かなきゃならなかったわ。戻ってくると、書いたぶんは全部リスが食べちゃった。まったく、あんまり僻地に住んでたんで、紙が手に入らなくて木の皮にオークの樹液で書いてたからなの」

シェイクス・ピアスンと較べてみると、ハンスも自分がそれほど見劣りするとは思えず、自分の書いた詩の一節を繰り出した。

「イブの幼き頃、ミューズたちが歌う

それは昼を除いてのことなり

君はその遙か音より集う

君こそ永遠なればなり」

「あたしをずいぶん年寄りにしてくれたのね。あたしが永遠？ えっと、それでシェイクスは別の木の皮を取って、また書き出したの『それを育てた老百姓 - それをかむ暇ありはせぬ - 』と、そこでまたアレで、ウィスキーを飲みに行ったわ。戻ってみると、さっきと同じこと。リスがおじさんの叙事詩を食べちゃった」

で、ハンスはまた読みあげた。

「出会いより前から君を夢見て、

僕はいつも君と共に

いにしえより詩人は君を讃えて、

今なおその筆を君に」

「そうね、みんながあたしのことを書いているのはわかってたけど、見破られるとは思わなかったわよ、ハンス。それでシェイクスおじさんはまた次に詩にかかったわ（うちの一族って、みんなしんぼう強いよね）『グラッグという名の老百姓 - プラグをいつも切り出して - あまりにそれを削りすぎ - 残りは穴に小さすぎ - 』で、最後の行を終える前に出かけて、また同じ」

ハンスは無表情に読み続けた。

「だがこの他、輝く真珠が連なって
君の十本の指を飾るよう
どんな吟遊詩人も歌わなかった言葉で
僕は君を讃えよう」

「素敵だわ、ハンス。で、シェイクスおじさんはまた書いたわ『俺が生意気な若僧の頃 - かみタバコは自家製で - ボロきれ、ブーツにブーツ脱ぎ - あきバコなども切り刻み - 』ここでまた酒に行って、そしたらその間にリスが詩をどうしたと思う？」

「食っちゃまった。僕たち詩人は苦勞が多い」
彼は続けた。

「そして地球が虚ろとなっても
君は今のままのパン種
君が天国で僕を忘れても
地獄で君を思い続けるのだね」

「スウィンバーン調ね。ということは、粗野の一步手前で、嘘だってことよ。二人はいつもいっしょだわ。あたしが決めたことですからね。それでシェイクスおじさん、自殺しちゃったわ。うちの家名の唯一の汚点。そしておじさんが残した唯一のメモにはこうあったの。『ミリアム（あたし、このおばさんの名前をもらったのよ）あのやくたいもないリスどもを何とかしろ！』って。おばさんはこれが何のことだか、おじさんがなんで自殺したのかさっぱりわかんなかったみたい。うちでそういうことに理解があるのはあたしだけよ」

「何でリスは最後のメモも食っちゃまわなかったの？」

「もちろん、それを読んで怖くなって逃げちゃったからよ」

「オーストラリアにリスなんていた？」

「あたしの知る限りではないわ。あたしをはめるつもり？ ワロビーって言ったら、それがどんな動物だか説明しなきゃならないじゃない。ワロビーは字が読めないから、話

が駄目になってしまう。ロイからフィネガン宛の手紙が来てるわ。おはようのキスをしに男の子たちのところへ寄ったの。まだ起きてなかったから、手紙をとってきてあげようと思って」こんな手紙だった

前略 マーガレットと私は明日、町に到着します。他に女をつくっていなければ、一緒に盛大なピクニックをしましょう。女をつくってる場合は、彼女たちも連れて来てください。私たちもあと二人男を見つけて、あなたとマリーとハンスの仲間入りします。それと、私たちが会っていないダーティーも連れて来ること。そしたら、その男にあてがう娘も探しましょう。特に変わったこともありません。十一月につくった庭は、今では雑草だらけです。パパがくわを入れておいてくれなかったのです。でも、昨日はこの放蕩娘のために太った小牛を殺してくれました。

明朝七時四十五分（朝よ、朝！）の汽車なので、迎えをよろしく。朝起きが退廃的だというあなたの考えは承知していますし、その通りだとも思います。でも、別にぱっちり目を覚ましていてくれなくてもいいの。ありのままのあなたが好き。

マーガレットが、彼女もあなたを愛している旨伝えるよう申しております。あの娘もあなたが欲しくなったのね。私がそうしたからというだけで、彼女もあなたに乗り換えたのです。でもヴィンセントには、私たち二人ともまだ彼を愛しているとお伝えください。ハンスも、マリーも、まだ見ぬあなたの友達ケイシーも、みんな大好き。では明日。

草々

ニュー・サウス・ウェールズ州

キャンベルタウンにて

一九四三年二月十一日（木）

愛をこめて - ロイ・ラーキン

右に同じ - マーガレット・マーフィー

ジョン・ソリー様

愛しいフィネガン

七、

ハンスとマリーはまだ桃源にいて、時間は相変わらず午後だった。他の時間はここにはないのだ。二人はもうずいぶん長いこと話しこんでいた。

「これであたし、婚約したのね」とマリー。「そして今日は二月の第二水曜日、示現祭の日。絶対忘れないわ。さて、こうなったらあなたに金剛石を買ってもらわなきゃね。それも凄い奴を。一番きれいなものって何？」

「鉱物学では輝きを五段階に分類してて、とても厳密だけど、山師風にパラフレーズすると下からピカピカ、チカチカ、ギラギラ、キラキラ、まばゆい、ってとこかな」

「いやらしい知ったかぶりね。それじゃまばゆいダイヤモンドを今日中に買ってらっしゃい。リングのサイズ7。ケチるんじゃないわよ」

「君、家族は？ 式には来る？」

「あたしは孤児だけど、一族は多いわ。おじさんやおばさんがいっぱい」

「例の文学があったおじさんたちも？」

「ええ、もちろん。まずショーが来るわ。ショームス・マグレガーおじさん。ショームスってというのは、王立帝国商務局に勤めてるから、(訳者註・ショームない……)警備員だけ。それからドライデンも。これはドライ・デニス・ドノヴァンおじさん。いつも - ああ、あたしたちも - 二つ追加ね、ケイティー。ねえ、婚約したのよ、わかる？」

「めくらにだってわかるわよ、あたしゃ目あきだし、追加お待ちどうさま！」

「 - いつものどが乾いていたから。それと、ジュール・ヴェルヌも来るわ、ハンス。あら、どうしたのよ。ジュール・ヴェルヌの話が聞きたいっていいなさいよ。フェアにやってくれなきゃ」

「その人の話をしてください」

「私の伯父であるところのシューレス・ヴェルニーズ・ヴァン・リーン、オランダのおじさん。ちなみにオランダおじさんって、口さがない人のことを言うこともあるけど。シューレスというのは……」

「シューレスだと濁点がぬけたし、発音もちがうぞ。はだしでうろつく人なんだろう？」

「それで見切ったつもり？ それほど散文的じゃないわ。はだしでうろつくのみならずおじさんは足で絵を描くのよ。水彩、油絵、炭画とか。巨匠なのよ。世界一のフット・ペインターなんだから。サーカスといっしょに旅してるわ」

「あと一週間でここを離れなきゃならないんだ、マリー」

「わかってる。式はできるだけはやくやるわ、月曜にでも。こんなことがあり得るとはおもわなかったわ、自分が誰かとこれほどじっくり行くなんて。凄いことじゃない？ なにか使命があるのよ。あなたとあたしの二人で、このボロボロの世界になにか貢献するんだわ、ハンス」

長いこと二人は座ってしゃべっていた。だが、時刻は一向に遅くならなかった。壁の時計はただの絵で、動かなかったからだ。カレンダーも一日分しかなく、春の三十一日と書

いてあった。この光景のなかの太陽も絵であり、しかも真ん中に眠そうな顔の描いてある太陽だった。

「いずれ、あとほんの少ししたら、もうこんなに飲むことはないでしょうね」とマリー。

「お祝いなんていつまでも続くもんじゃないし、今までが長すぎたくらいなもの。私たちのどちらか、そうでなければ友達の誰かが破滅することになるわ。でも、今日は大いに飲んで食べましょう。新郎新婦がそろっているんですからね。べつに冒涇じゃないでしょ、ね？」

ケイティーが常にグラスを満たしてくれた。ずいぶん長いことたってから、ようやく二人が席を立ったころ、桃源ではまだ昼すぎだった。

だが、外の通りでは、もう夜も遅くだった。

八、

スタインがなんでこのピクニックにやってきたのか誰も知らなかった。誰も彼を誘わなかったし、あるという話さえしていなかった。だがスタインは地獄耳（その外見は、フィネガンの鼻なみ）で、どこのどんな話も聞きつけるのだった。彼を誘うとすれば、ハンス以外にはおるまい。ハンスはよく無考えに親切なことをするのだ。だが、スタインは実に親切にしてやりにくい男である。それに、ハンスも彼を誘ったおぼえはなかった。

なににせよスタインはそこにいて、事を仕切ろうとしていた。ケイシーは、スタインが行くなら自分は行かないと言って、その通り来なかった。そして堂々と去ってゆくついでに、新しい三人の女の子のうちで一番綺麗な娘を連れて行ってしまった。トム・シャリアとフレディー・キャッスルはいた。ヴァージニアとドロシーもいた。この二人も赤毛の街娘だった。

ベイ・ホテルでは、彼らのためにダブル・テーブルをテラスに出してくれて、そこに料理を山のように運んでくれた。テラスと浜辺の間の芝生で、みんなでソフトボールをした。そのあと種目を変えて、サーフィンに挑戦してみた。

まっとうに泳げるのはハンスとマリーだけだった。二人は沖に泳ぎだしていくと、やがて見えなくなるほど遠くまで行ってしまった。

「ハンスさえついて行ければ、二人してアメリカまで泳いでくださるうな」とフィネガン。「なんでパナマ運河を使わないんだろう。真っすぐホーン岬に向かってたぞ。途中でへばらなければ五週間で済むけど」

何度か海につかって、みんなで芝生に横になった。スタインは、クラッシュ・アイスとギルビーズ・ジンのボトル何本かを持って、バーテンをやった。フライング・スタイン

メッツとスタインハイム・スティンガーを作った。スタイン・ゾンビ（いやあ、こいつを
発明したエライ奴は実に的確だ、とフィネガン）も作った。スタイン・コリンズと、ア
イン・スタインもつくった（ただし後者は一人一杯限り。強いのだ）。そしてスタイン・
ジューレップも。さらにドクター・スタインのフジツボじょこう液まで調合した。ジンは
特級、氷は冷たい、そして「このスタイン、何にも増してすばらしいパーテンなのだ」と
は御自身の言である。

だが、必ずしもその通りではない。ときどきスタインはみんなから離れて、可笑しさ半
分、哀れみ半分、羨望少々、軽蔑がさらに少々、そして四分の一は自分の所有物を見るよ
うな、そんな目つきでみんなをながめるのだった。これだと合計が一以上になるというな
ら、つまりその視線はあふれでていたのだろう。

数時間して、マリーとハンスが水からあがってきた。ハンスは多少へばっていたが、マ
リーのほうはキンセンカの花のように生き生きとしていた。

「アメリカまで泳いでくると思ったのに」とロイ。

「触っただけ」とマリー。「それでそのまま引き返しちゃった。あんまり待たせるのもな
んだから」

ウェイトレスが、爪やハサミや小バサミを持つ甲殻に身を固めた生き物を積上げた巨大
な海の幸の皿を十一も運んできてくれた。顔ほどもある熱いロールパンが、バターに蜂蜜
に紅茶と一緒に出ていた。それを、みんな日が沈むまで食べ続けた。

ここの空気は、他のどこにも比し難い。オーストラリア・ワインのごとく、北半球の物
より良いとも悪いとも言えるが、少なくとも同じではない。空気も日の入りも、ここでは
北と同じではないのだ。

ホテルは芝生でたき火をさせてくれなかったが、さっきのウェイトレスがたどんをのせ
た幅二フィートの木皿を出してきて、火をつけた。みんなでそのまわりにすわって子供の
頃のキャンプの歌を歌った。「クレメンティン」に「イワン・スクリャピンスキイ・スク
レーパー」、「レッド・ウィング」と「ケイシー・ジョウンズ」、「キャンプ・タウンのレース
場」と「ライウイスキー」。「孤独な恋の小径」。「誰がああ娘にキスしてる」。「フランキー
とジョニー」。「スターダスト」。「ワルツィング・マチルダ」、それに「長い長い道がくね
り」も。

フィネガンがうたった。

”Vecchia zimarra senti

Lo resto al pian

Ascendre ”

何かオペラの歌だった。フィネガンの声は、異国めいたものののをのせると良く聞こえた。歌詞はわからなくていいのである。

それからハンスがハーモニカで消灯ラッパを吹いて、みんなで車に乗りこむと街にもどった。

九、

ジョン・ゴットフリート・シュルツ（ハンス）とマリー・アンナ・モナハンは、一九四三年二月十五日、オーストラリア シドニーの受胎告知教会で結婚した。友達は、男も女も一人も出席していなかった。ジョンは軍からまだ結婚許可を取っていなかったので、しばらく秘密にしておくことになっていたからだ。出席者は二、三十人、すべてマリーの親戚だった。

それから二人はマリーの伯父の一人の所有する百キロほど内地の農場に数日でかけた。

そして二月十八日は火曜日、ハンスやその他の連中は軍配属局に出頭し、ニューギニアに配置がえとなった。

十、

ロイ・ラーキンに捧げる
フィネガンの対蹠賦

少年の歓びの輝ける残滓のために

放浪詩人の言霊を借りて

ぼくはロイへの対蹠賦をつくる、

トランプの家のように。

摩擦音と無声音を紡ぎ

黄金の中に黄土を混ぜる。

それを溶かして鑄型にはめる。

言葉の綱を織るのがすきだ。

きみの髪はピンクの偶像で

へべれけピエロにふさわしい

それはシドニーに華をそえる。

O quam beata Civitas!

(なんと幸せな街よ！)

きみは南の激流と馬鹿騒ぎを飲み、
人生から陽気さを、
母からはシャンディーギャフをがぶ飲みし、
もやのかかった流行語で歯を育てた。
世人のように代議士で
難局にもあたらず後悔も起きず、
我ら未だ半ばにして楽しまず、
酒でかび臭いものを飲み下すこともない。
膨大な何かを逃した我らは
劣った連中にさえ来るそれが
なぜ与えられないのかも判らない。
Terribilis est locust ist!
(おそろしい街だ！)
あるいはいつかどこかで
ぼくも別の装いを得て、
すべての隠喩の亡霊が
ほの暗い中で眠りにつくかもしれない。
そしてきみは忘れ難い夜明けのように
消えると共に輝きを増すだろう、
ちょうどロトの妻が
死んだ時に塩気を増したように。
霧は木々の間に濃い。
ぼくは真夜中の海をながめ、
闇の中で汝を思い出す。
こんな対蹠思考と共に。

フィネガンは必ずその膨大な何かを逃がした。それでこそフィネガンなのだ。

第2章

緑の島々

一、

「古の物書きの内、ストラーボは島の感覚を心得ていた」とフィネガンが言った。「でも、海の島を見たことはなかった。聖パウロもそうだ。ザビエルは大群島に遣わされた使徒だった。世界の果てを過ぎて、まだ海に丸々一杯の島があるなんて奇跡だと確信していた男だ。ここの島は海の星座で、天を予表する。あれ、口に出しているつもりはなかったのに」

「構わんよ」とハンズ。「誰でも口に出すもんだ。島の話？」

「その生立ちの話。エーゲ海では琥珀金の杯が砕かれて、破片が白、金、銀の島になった。マラヤのあたりでは、青銅の鉢がこわれて、破片が細長い島になった。青銅は細長く割れるからね。そして、さらに下ったここでは編んだマットだった。これが海におちて、大海亀にバラバラにされて、するとその切れ端がそれぞれ根をおろして、緑や繊維色の島になった。ギニアには亀たちの残した真ん中のとこだ。中央の縫い目が島の全長にわたる山脈の尾根なんだ。

これが島の誕生の伝説、神話。でも、はじめに各アーキペラゴはペンタネシア、つまり五つの島群だった。エーゲ海ではそれぞれアンドロス、ティノス、パロス、アマルゴス、それと名前忘れたけど五番目の」

「ナクソス」とハンズ。「でも、アーキペラゴっていうのは、もともと大洋という意味だったのであって、その島じゃなかったんだぜ」

「アーキペラゴのもとの意味も、今の意味もわかってるさ。ただ、五というのがいつも魔法の数なんだ。人が孤島であるのは難しいけれど、アーキペラゴの中の一つであるのは簡単だ」

南から大堡礁をかすめ、一昼夜ダントルカストー諸島とトロブリアン諸島の周囲でずごし、狭い中国海峡を経て、彼らは故郷のこの湾にもどってきた。あたりはすべて原色で

ある。青はまばゆいほどに鮮やかで、『空気は無色透明である』というのが嘘のような金色の空気、水は別の青、沖でウィッチ・グリーンにかわってゆく。そして陸地の鮮やかな青、緑、茶。

だが上陸してみるとあたりはもっと暗い。明るいのは海と空気なのだ。緑は樹木のでっぺんにしかない。地面からだと波止場の下の暗い部分のようで、上のほうまで木の幹がむきだしとなり、下枝が枯れてぶらさがって、いつも下は濃い影となっている。

「『景観密度係数』という概念をつかおう」とケイシー。「いま発明した概念で、まだ世に認められていないけど。でも、ここでは係数が大きくなっている」

そのとおりだった。小川も密に流れている。ニキロ弱の間に十二本が、どれも激しい勢いでこの湾に注いでいる。崖が高く切り立って、オーバーハングになっているところも多い。植物のからみあった根をはしごのようにして登ることもできるが、急斜面の植生は密集していてとげが多い。斜面の裂け目や切り通し、溪谷が迷路のようにあたり一帯をはしっている。平地は全然なくて、垂直面と崖しかない。

そして山頂はただのたよりない山の背で、すぐに次の泡だつ小川になだれおちていく。地形はやたらにいりくんでいて、三百万平米のうちに滝が五十以上、高度差は六百メートルもあるので探検には何週間もかかるはずだ。差し渡し十メートルもないが深さはその三倍以上あるような、深い穴や泳ぐのにいい水溜りがたくさんある。

穴だらけの崖のなかは何キロもある洞窟がスポンジのように走り、何千種というトカゲと何万種類の鳥がそこには住んでいる。

この三百万平米のうちに四十弱の原住民の家族があり、相互の交流はほとんどない。三つの異なる言語がある。そして四番目の小部族があるかもしれないのだが、その実在性については他の部族の者でさえ確信を持っていない。泡だつ小川をずっとさかのぼったところでは毎朝雨のあとに幽霊が出るが、一時間たつと消えてしまう。

これだけのものがたった三百万平米のなかにある。同じ三百万平米でもアメリカのカンサス州にいけば、ニキロ先の柵がかんじょうにできてそれ以外に目につくものはなにもない。

ここはブラック・パプア。

ブラック・パプアはおばけでいっぱいだ。民話はどれも幽霊話である。夜な夜な、連中は死んで煉獄巡りをしては、朝になって身振るいしている。それでも昼間は、渴望と畏れをもって夜の訪れを待ちこがれる。死者からは念入りな指示が与えられ、いろいろなことがタブーとされる。日中は無感動で、夜の幽霊の時間をいつも待っているようにみえる。

愛想の悪い人々である。この先、一行が出会うはずのにこやかなマライ人やタガログ人とは大分ちがう。よい百姓でもなければ工匠でもない。小屋は、沖合や湾内の島から来る

キリウィナ人などに建ててもらっている。自分では建てられないのだ。

しかしながら、パプア人こそはこの世の井戸である。底なしの無意識をもっているのだ。この世のほかの人々や土地は、全部パプア人の無意識の中の一要素にすぎない。キリウィナ人や、あたりの住民はこれがわかっている。自分たちはパプア人の苦しみによってのみ存在しているのだということ、パプア人が広大な意識下の洞窟に自分たちを残しておいてくれないければ、すぐにも消え失せてしまうということ。しかしながら、もっと遠くに住む人々は、こいつがわかっているないのである。

一、

ヘンリー・サルバトーレは、ダーティー・ファイブの残りの連中が戻ってきて御満悦だった。「この軍隊をたった一人で切りもりしていたのでね。そなたらが大して役に立つというわけではないが、多少なりとも違うものだ。では再度、些事は任せることと致そう。それにしても、待ちかねたぞ。

御時世に遅れるといかんから、そなた宛の手紙は読ませてもらった。例のショウ・ボートとかいう娘から何通か届いておるぞ、ヴィンセント。わしのことも好きだと書いてあったな。会ったことのない人間には好かれやすいたちなんだ、わしは。ケイシーよ、友達のデュフェイ君から長いのが来ている。わしにはわけのわからん下りもあったが」

ケイシーは腹立たしく思っていた。彼だけは、自分宛の手紙が先にひとに読まれるのを嫌っていたのだ。これに限らず、いろいろな意味でケイシーは皆より気が短かった。「とかくメダカは群れたがる、」というのが口癖だった。「群れるのは俗物の宗教みたいなものだから、連中がベタベタするのは仕方ないよ。でも、我々クリスチャンの交わりはもっと淡泊であるべきじゃないか」

「さて、おのおの方、」とヘンリー。「一本ずつちゃんとみやげを用意してきたであろうな。テーブルの上に並べるがよい。こっちも礼が一度ですむ」

そこで一同は貢ぎ物を取り出して、皇帝ヘンリーに敬意を表した。ダーティー・ファイブのしんがりヘンリーは、ほかのメンバーとともにオーストラリアには行かなかった。でぶのフランス人。並ぶと、猫背のくせに周りから十～十五センチ頭がとびだす。さらに、この男の器は、身のたけだけで計れるようなものではなかった。

腕力では、一日一時間ウェイト・リフティングをするハンスより強いし、五十メートルまでならフィネガンやヴィンセントより脚も速い。巨人か人喰い鬼といったところだ。ちいさな子供を怖がらせ、若年兵も怖がらせる。手のひらだけでも、下手な人間一人前より器が大きい。

ヘンリーは、オーストラリアで休暇を過ごすことを拒否した。ここの方が安全だと考えたのである。「わしは好色漢で、飲んだくれで、大食らいで、おまけにけんか騒ぎが大好きと来てる。公共の福祉のためには鎖につないどくべきなんだ。街に出るよりジャングルにいたほうが害が少ない」という話だった。

ようやく、五人は何週間かぶりに一堂に集い、たそがれに四角錐を形造った。(ヘンリーは皆の留守中に礼典主義者に戻っていたので、しばらくの間は全員一緒に行動することになる)

ダーティー・ファイブは神秘主義的な集団である。まわりにいる黒ん坊たちの秘密の兄弟組織のようにかたく結ばれ、分かち難い。

ヘンリー・F・サルバトーレ(デブのフランス人)(あるいはエウフェムス、艦隊の本当のリーダー)。

ジョン・G・シュルツ(あるいはハンス)(あるいはオルフェウス)。

ヴィンセント・J・ストラナハン(あるいはメレガー)。

カシミール・W・ツィマンスキー(あるいはケイシー)(あるいはペレウス)。

ジョン・F・ソッリ(フィネガン)あるいは取り換え子、あるいは別の血筋、二重の血筋を持つ者(そして、あるいはイアソン)。

この五人とも、かつてこの世に生を受けたことがある。神話にもその名は登場している。

ロビン・フッドの仲間のタック、パンタグリユエル、「ジャックと豆の木」の巨人(ヘンリー)。

アポロ、ファウスト博士、アクイナス(ハンス)。

ディオニソス、ユリシーズ、あるいはテラス、アッラハト(フィネガン)。

メルクリウス、ドン・ヴィンセント・デ・オッロス、アウグスティヌス(ヴィンセント)。

カシミール・ゴルショク(クロック{ヨタ話}のケイシー) 九世紀の学者兼魔術師。

これら五名、この特別な五芒の民の者たちは、この世界には帰属していない。過ぎゆく時間のなかにあって、不思議の世界に属している。お互いにすべてを知り、あらゆる思考を思考し、すべてをやり尽くした、少なくともやる予定にはしてあった。兄弟の縁に結ばれていたが、最も遠い者が一番濃い血を持っているのだった。かつては偉大な行いも成し遂げていたが、その後、健忘症がすべてをめぐい去ってしまった。

一同は今や酒をくみかわし、たまった手紙や故郷の新聞を処理するのだった。ランプがわりに、ガソリンをつめたビール瓶を、きつくねじったボロを芯にして使っていた。

ヴィンセントには、テレサ(ショウ・ポート)ピコーネと、母親から手紙が来ていた。

ケイシーには、母親からの手紙と、メルキセデク・デュフェイからの長い私信、シカゴのメアリー・キャサリン・カルーサーズから二通届いていた。

ハンスには、父親から便箋半分の短いドイツ語の手紙が来ていただけだった。だが、読み終えたハンスは奇妙な振る舞いに及んだ。手紙を前にして、二通の手紙を書いたのだ。軍に入って以来、初めて書いた手紙だった。

フィネガンには、ニュー・オーリーズズのドロシー・イエコリスとかいうのから来ているだけだった。

ケイシーは、デュフェイからの手紙のくぐりに戸惑っていた。

「ここには私が耐えねばならない問題があるのだ。あの奇妙な連中に追われているのだ。『ザ・クロック』(ヨタ話)を脅かしているのだ。私は月いちでしか出していない。奴らは私を誘惑し、脅し、打擲してきた。(かつてサタンがそうしたように)世界中の富を、あらゆる王国を持ちかけてきた。資金や配本ルートも手に入り、ザ・クロックも週いちで出せるようになると言う。奴らは雑誌を歪め、侵入者達の道具にしてしまうだろう。そして私が応じないと、奴らはぶつのだ。

妻は、一時的にだが家出した。まだ私が脅迫されていない頃だ。というのも、奴らは私の過去から、私の覚えている以上の汚物を引っ張り出してきたのだ。妻は戻ってきたものの、二度と昔のようにはなるといまい。奴らは文字通り私を打擲し、鼻を潰した。右手も潰されて、脇腹はテーピングしてある。昔はいいけんかなら好きだった。が、私も歳だ。

株は一株たりとも売らな。今度は君のほうから切り崩しを計っているのだ。君のいるあたりには鉄砲玉がおくりこまれていて、標的の一人は君だぞ。口のうまい、耳の突き出た男でヒューゴー・ストーンの名を使ったことがある。奴らにしてやられるな。多少の流血は惜しむんじゃない、それくらいはすぐに取りかえせる。身も心も滅ぼす者たちの令状を忘れるな。

こちらは変わらない。私も、青あざや骨折はともかく、朗らかで元気にやっている。君はそっちで、面倒を肩代わりさせられるような信頼できる友を持つべきだよ。戦争では、常に死の危険と隣り合わせだ。今は、その危険が君の近くにいます。だが、何をやるにしても、心配するな。心配すると老けて鈍くなる」

ヘンリーはケイシーが読むのを眺めていた。

「やっかいごと？」

「いや。他人の手紙を読むもんじゃないぜ」

「読まないよ。おもしろいやつじゃなければ。鉄砲玉ってのはスタインか？」

「スタインが鉄砲玉だ。ザクロックはきてる？」

「棚の上にある」

ザクロックは薄いタブロイド版だが、なかなか手がかかっていた。表紙には相変わらず、非常に古く非常に華麗なおまの絵が使われていた。ド・アレサンドロが彼のシカゴ

中期に彫った原版による刷りである。この種のものとしては最高のものだ。この種のものとしては唯一のものだ。この世で最も美しいおまるなのだ。

ザクロックの誌名は黒のゴシックで入っていた。「旧SのC」という添え書きが、その初期の隠秘な生いたちを物語っている。全二十頁のうちに、シュレードのソネット、エティル・エレンパーガーの賦(オード)、論説では「今日の世界における悪魔崇拜」トス・J・クローネッカー(イエズス会所属)、クリストファー・トムキンソンによる「リベラリズムの神話学」一編、「フローティングスクリーン・アメリカン・フットボールにおける重要な新進歩」トム(ビッグ・ベア)ロジャースを収録。「海外出版情報」のコーナーもあって、担当はポリリー・ポリゴットとなっているが、これはメアリー・フランシス・ラティガンである。

雑誌のほとんどの記事はデュフェイの手になるものだった。ほかの人間の記事を載せたくなかったというわけではないが、彼のほうが筆がたったのである。「草の根のモグラ」はかれ独自のスタイルであり、「フェビアン主義における蛇庵寓話」もそうだった。「消費者、生協、および価格安定性の方程式」も。「邑と世界と」というページは、シカゴと世界のその月の記事を扱っていた。シリアスなレビューのページ、「審判の日」があった。シカゴ・スタイルのジャズに偏向した新譜紹介、そして手紙による賛否の大フォーラム、これこそこの雑誌の最高の部分だろう。

グローベンの木版四枚、そして裏表紙には「廁にて」と題した黙想集があり、一番下には、三日月形の光のすじだけが走る薄明かりの中の“考える人”の絵が小さく描かれていた。

三、

「一体何が哀しくてそんな雑誌を乗っ取りたがるのかね、誰にせよ」とヘンリーが尋ねた。

「ちょっと見よりはいい雑誌なんだ。取るに足る連中、少なくとも模倣されるだけの人物の間では定評がある。あれの影響力は、想像を絶するよ。物凄い反響があるからね。誌上でちょいと意地悪くしてやればユダヤ人にはいい薬なんだけどな」

「デュフェイってのは、そもそも何者かね？」

「中道主義者、米国カリソック中道党の唯一の党員だよ。彼が党なんだ。ド・アレサンドロとメアリー・フランシス、デメトリオ・グラウチにオレは、党員候補のトップ。オレたち全員を党員にできたら、五人の党になるわけ。もっと小さい党でも、ヨーロッパではかなり健闘してるけど。でも、流石に一人で党をやるのは寂しいだろうなあ。

あいつは新しい定義を信じている。やつに言わせると、自称自由主義者は一番不自由な連中なんだって。あの大集産主義者が自由主義という言葉を詐称して、正反対の意味で使って以来、まっすぐな人間なら自由主義者を名乗りはしないってさ」

ヘンリーとケイシーはジャングルの中へ歩いていった。二人は濁った小川の川床につくまで歩いた。天井川だ。

「メルキセデクという御大層な名はどこから？」

「堅信礼でもらった名前だ。四十になるまで堅信礼を受けなかったんだ。本名はマイケル。もうヒゲは生やしていたんだ。やつがヒゲだらけなのは見当ついていただろう。先のとがった立派なあごヒゲで、持ち主の人となりを良く表していたな。当人は卑下するだろうけど」

ここには大きな滝つぼがあった。暗いなか、二人はそこで泳いだ。パプア人に言わせると、精霊にとりつかれるので危険な行為だそうだ。水から上がって丸石二つに腰を下ろした。ジャングルの中には狐火がとんでいた。地面の枯れた木や腐った落ち葉が石炭のように光る。

「なんでも、自由主義は彼の生涯の間に完全に立場を逆転させてるそうだ」話しているのはケイシー。「前は小さな政府を支持していたのに、今では大きな政府支持だ。ヨブを飲み込んだレヴァイアサンを、昔は他の鯨よりちょっと大きいだけだと信じていた。今はほかの鯨を丸呑みできるほど大きかったって言う」

「党では何を？」ヘンリーが尋ねた。

「政府の規模縮小とかいろいろ。あいつのアナロジーはわかりづらくてね。新しい自由主義はパルチザンなんだって。単一の思想と教義、しかも古代の圧政と密かに野合してるやつしか認めない連中なんだってさ」

「つまりは現政府が気に入くない、と」

「小さければ小さいほど気に入るんだ。でも、ヤジる奴らの邪魔がある。聖餐朝食を開くと、潜入者たちがはるばるボストンからやってきて、嫌がらせをするらしい。それが実際に判るんじゃないけど、胃腸が丈夫で自動的に腐ったやつらは排除するんだ。いずれオレも排除されるかもしれん。できることなら潜入者どもも認めてやりたいそうだけど」

「そいつらは、カソリック教会の潜入団体から来ているのかね？」

「デュフェイは信徒グループ内のやつら数千人のインデックスを作ってるぜ」

「なんでそんなインデックスを作りたがるのかね。まるで間違ったやりかたをしてるかもしれないのに」

「正しいやりかた知ってるの、ヘンリー」

「いいや。でも、いずれわかる。そうだな……明朝には」

「どうしてわかる？」

「ただわかるのだ。やってくるのが感じられる。説明できるものなら説明したいのだが。ケイシー、わしはこのグループ唯一の蛇だ。全然おりこうではないし、それはおぬしも知ってる通りだ。他の三人が、意地の悪いまねをした例を一つとしてわしは知らん。一つも。おぬしについてはある。が、それもさほど多くはない。わしと一緒にではないんだ。わしはおぬしの知る以上にずっと悪人なんだ」

「要するにどういうことだ、ヘンリー」

「つまりわしはただの沼地出の意地悪いフランス野郎なんだ。おふくろでさえわしを見離したよ。悪魔にさえ善良になる希望があると思っていたおふくろがなあ。わしは、あのバナナ鼻のフィネガンのようにこの世と折り合をつけられん。やつのが世の中との間違った折り合であるにしてもだ。ヴィンセントみたいに見てくれもよくない。ハンスのような学者でもなけりゃ、おぬしのようなディレッタントでもない。だが、残りの連中、ハンスにすらできないようなことがあると、わしにはそれができるのに気がついているかね。おぬしらの議論が行き詰ると、わしがそれを解決してきた。さて、いま何かがやってこようとしている。そいつを片付けられるのはわしだけだ。奇妙なことがふりかかる、それも必ずしもわしの思ったとおりにではなく。これまではこの身に何が起こるのか、いつもかなりはっきりとわかったものだが。そしてこの度、その何かがわしの頭上に落ちてくる」

寒くなってきた。二人は玉石の上で服を着た。

「南の方では面白かったかね」ヘンリーが尋ねた。

「フィネガンはね。それが聞きたいんだろ。あいつ、まだ乱心が治りきってないかもしれない。ヴィンセントとハンスも楽しんだよ。オレもちょっとはね。連中と一緒に出かけ、暇と金をちょっと無駄に使うのもいいもんだ。この島々もいいな。うちに帰るのはぞっとするなあ。オレには扱いきれないことが待ってるから、あと何年かは放り出しておきたいよ」

ビバーク地点までジャングルを下っていった。頭上にはココナツ・オポッサムがキイキイわめき、「オットォ」鳥が鳴いていた。この鳥の本当の名前は、我々にはとうとうわからずじまいだった。鳴き声が、いつもドナルドダックの「オットォ」という声に似ていたのだ。

フィネガンはまだ起きていて、三人で飲んだ。

「Z, drovie,」とケイシー。

「Sante,」とヘンリー。

「Slainthe,」とアイリッシュのフィネガン。そして彼は、自分の中の別人のためにも一

杯飲んだ。「Salute,」とイタリア人ソッリ。

四、

ヘンリーはその夜、予期していたとおり夢を見た。それも、船の夢を。船の名前はナヴィキュラ・ペトリだった。ガレオン船のように見えたが、まったく別物だった。旗やペナントがたくさん翻っていた。

Ih hoc signo vincet、と旗の一つに書かれていた。そして別の一枚には、フィネガンの手書きの筆記体で、それもフィネガンの左手の字で - というものフィネガンは半分は左手で書いたから - こう書かれていた。Nissi eses sollicitus.....ここでラテン語がかき消されて、はっきりと翻訳された。「注意深くできぬなら、せめて善良であれ」

Ubicumque fuerit corpus illic congregabuntur et aquilas、と別の旗。これはダーティーファイブの崇高なるモットーから来たものだ。それからシリーズものの旗が三枚あって、それぞれこうあった。Tu es Petrus、そして Portae inferi non prevaletur、そして tibi dabo claves regni。

様々な紋章もあった。小羊にギリシャの十字架。魚と六点形。「ずっと五点形だと思っていたのに」とヘンリー。「それにしても、何でそう思ったんだったかな」

女と、蛇と、三日月があった。「もしわしがあの小船をつくったのなら、紋章を統合して小ぎれいにするね」

これがおもちゃの船なのか、それとも遠くから見た本物の船なのか見極めるのは難しかった。一部はこの平凡な世界よりひたすらリアルだったし、一部は子供がクレヨンで描いたものだった。船員は人形かもしれなかったし、生きているかもしれなかった。使徒たちがいた。それにステフェンとパウロと洗礼者ヨハネも。ライナスとクレエメントとクレトスも。うにのようなバルバラとカザリンがいた。グレゴリウスにコンスタンティヌスがいた。ジェロームとアウグスティヌスはダビット越しにお互いを見つめあっていた。フランスとアントニウスがいて、さらにトマスとパトリックとヒルデブランドとオランダ人のエイドリアン。フランスとスペインからそれぞれのテレサ。そしてジャンヌとザビエル。

「連中が判るというのもおかしな話だ」とヘンリー。「だって今まで見たこともないんだから。でも、それが事実だ」

船は困ったことになっていて、波が高まり風が出てくるにつれて船の本物らしさは増してきていた。本物の船で、派手にゆさぶられていて、et descendit procella venti in stagnum で、et complebantur et pericletabantur で、そしてこうした説明は外国映画の

字幕スーパーのようにヘンリーのために彼の母親に翻訳されていくようで、un tourbillion fondit sur le lac La Barque se remplissait d'eau -

「ああ、お構いなく」とヘンリーは夢に告げた。「そのくだりならわかる。フランス語訳よりもブルガタ訳のラテン語訳聖書のほうが好きなのだ」

波しぶきには塩気が混じっていた。ガラリア湖は塩湖だったっけ。それとも、これはもっと大きな海に浮かぶ、もっと大きな船なのだろうか。

そしてヘンリーは、くだけて壊れたマストに今初めて気付いた。かつてはたくさんのマストを持ち、船は巨大な白亜の城のように帆走したのだろう。だが今や帆は裂かれ、たたまれていた。黙示録にその背信が予言されている白崖のアルピオン（イギリス）があった。第三のローマたるモスクワがあった。あのゴールすらあった。他もひっくりかえってふらふらしていた。

船を眺めているものは大勢いて、およそ誰でも手を伸ばして船を助けてやれただろう。だが人々は、ヘンリーが最初思っていたように、それがただのオモチャの船だと信じていた。彼らはそれが本物の船で、沈みかけているのだということを知らなかったのだ。そして、もしそれが沈めば、一緒に全世界も沈没してしまうのだということも。

だが、沼地のフランス野郎ヘンリーは、船が本物で、自分がそれに関わっていることを知っていた。さらに、それが自分も一度航海したことのあるアルゴ船と同じ船だということも知っていたが、その探索行はこのわずか千年ほどの間に聖化されてしまっていた。

そして、目を覚ます前にヘンリーは知った。これが与えられた天命なのだ、と。そして、承知しようとしまいと、それは既に自分に降りかかってしまったのだ、と。

五

スタインがまたもしゃしゃりできてきた。特務軍曹としての任務の一つは部隊のために話題と娯楽を提供することで、彼は小さなG・I・向け放送局を作っていた。ピラミッド状のテントを二つ、自分自身とその八面六臂の活動のために持っていて、その一つに「はまだら蚊放送」があったのだ。

ケイシーは局のために風刺文を書いていたので、大嫌いだったにもかかわらずスタインとつきあう羽目になった。

偽スポンサーはたくさんあった。「マッカチオン母さんの船酔い薬 - 人生耐えるのも必要だ」「ジョー・トムキンソン伯父さんのバクダン・ジュース - 自然の手法でふっ飛ばし人格」「ハリー・ルーデンシュラーゲルの二日酔い直し - 頭を割るばかりが能じゃない」「チン・リン・チャーリーの安宿 - 上品な同宿者とベトつくほど親身のサービス、お友達とご

一緒に」など。

いいレコードが百枚ばかり、ラジオに出たいという連中はいつも山ほど。それにスタインは古いユーモア雑誌を一メートル半に及ぶ棚一杯に持っていて、その中からジョークを読んでオン・エアしていた。

いい番組だったのだが、何か欠けていて、それはアンにしか出せなかった。アンはジャワの放送局から日本人のために放送していた。親しみやすい声をしていて、ホームシックをかきたてるような歌をうたい、そして兵隊を理解していた。どういうわけか、スタインはアンに太刀打ち出来なかった。特に彼女がこうサイン・オフするには。「こちらあなたの最高の敵、アンです、おやすみなさい」

スタインは別の活動を持っていた。講演をするのだ。彼は口がうまかったし、客は無学だった。ダーティー・ファイブの誰もが、揚げ足をとってもしようがないと思っていたが、ケイシーだけは別だった。そしてこれがケイシーの苦勞の始まりだった。

スタインはマンネリだったから、野次り倒すのは簡単だっただろうが、ケイシーはそうしなかった。彼は質疑応答の時間にスタインを問いつめ、聴衆は何がおかしいのか理解してしまった。そこで、質疑応答の時間は廃止されねばならなかった。そして対決が行われることとなった。

ケイシーはかんかんに怒ったレイチェック大佐と、マイヤーホフ、トウィッチャーバイ、ターウィリガーという激怒した少佐三名の前のじゅうたんに立っていた。このうち誰一人として戦列将校だったことはなかった。

「ツィマンスキー軍曹、自分がどういうことになるのかわかるとるのかね」と大佐。「背信行為で軍法会議にかけて、有罪にしてやることも出来るんだぞ」

「閣下、スタイン軍曹は別の名を使って、シカゴでは有名なアカだったのであります。それがここで教義を教えているのですよ。自分は閣下御自身の御署名に基づいて設定された公開討論の時間に、彼の非常に不正直な虚偽の言説について指摘したのです。それが間違っているのでありましょか」

「軍曹、あんまりこだわると困るのは自分だぞ。今回だけはやり直す機会を与えてやろう。今後二度と、いかなる場合にもスタイン軍曹の妨害をしてはならん。これは命令だ。他の兵士に向かって彼を侮辱することも禁じる。彼と違った内容の発言や演説も禁ずる。背信で有罪にしてやるというのは本気だからな、つまりは懲役十年ということだ。わかったかな？」

「いいえ、どうも彼の演説の問題点をわかっていただけていないように思うのであります」

「馬鹿もん、貴様、あの演説の原稿を書いとるのはこのわしだ。これでわかったらう、

え、どうだ？」

「ははっ、お言葉と御意思、確かに理解致しました。この三分間で大いに学ぶところがあつたように思います」

問題は、ここでケイシーがいささか臆病だったことにある。彼はためらいがちで、半ばはったりにかかっていた。そして、いざ逆らって行動し始めたときも、やりかたはあまり賢くなかつたし、タイミングもまづかつた。何事においても彼はこんな具合だった。

六

ヴィンセントはセント・ルイスのショウ・ポート(テレサ・ピコーネ)から手紙をもらつた。

「ヴィンセント、ダーリン、こっちは何もかも最悪の状況です。いい書き出しでしょう。おかげさまで当方一同つつがなく……とかいう書き出しに比べて変化があるわよね。スープだってほこりが多少落ちてたほうがいい味がすると思うの。一日中寒いです。誰かと同棲すればあつたかくなるかしら、とママに言ったら、「あたしならそんな真似はしないねえ、テレサ。ヴィンセントが何というかしら」ですって。まっとうな道に引き戻してくれるママがいるというのは有り難いものです。

あなたのお母様はあたしに御立腹です。三日間こちらで過ごして、毎日違った特製料理を作つて差し上げたら、ニンニクの匂いが家から一ヶ月も脱けなくなつてしまつたせいです。慣れるよりしょうがない、と言ってあげているのですが、なんでもニンニクは罪のようなもので、世の中にたくさんあるのは仕方ないことではあるけれど、それを抱えてる奴には災いあれ、なんですって。今では気にならない程度には慣れておしまいになつたようで(ニンニクに、よ、罪にではなくて)、そろそろ飽和していずれその匂いを認識すらできなくなると教えてあげました。そんなのはお気に召さないそうです。実際のところ、マダム・モニカとこのテレサはとてもうまくやっているのですが、なぜあなたがこんなに威厳のある御母堂をわざわざ選んだのか、どうしてもあたしには理解できません。いい巫女さんになると思わない？ 演技の練習をさせて、いずれスター&ガーター劇場に出してあげましょう。

そのS & G劇場も、それなりの問題を抱えています。バラエティーショーの宣伝を止めないと、営業に制限をつけるかひょっとすると閉鎖させるぞ、と脅されているの。パパは純粹で、オレのショーだって純粹なんだって言ってるわ。最も根源的な意味におけるバラエティーショーなんだって。(あたしに言わせりゃ“最も特殊な意味で”ってところね)パパは、オマワリもエライさん連中も、一度文献学の講義をざつと受けるべきだってわめい

てたわ。言い争ってもぜんぜんいいことなかったけど。バラエティーショーの看板はまだしょってるわよ。

だいたいこれは、アメリカ最期の本物のバラエティーショー劇場なのよね。おかげであたしたちはあまりいい目で見られないけど。月曜には、仕事を探しているストリッパーがやってきました。NOLAから来たイタリアの娘だったわ。フィネガンのことを聞いてみたんだけど、やっぱり知らないみたい。一文無しなので一緒に住んでいます。端役をあげてるんだけど、気に入ってもらえません。とにかく何がなんでも服を脱ぎたいんですって。名前はマリア・トルナブオーニ。ルネッサンス風のいい名前だし、彼女自身ルネッサンス・スタイルなの。彼女の張り出しを見ると、ほら、わかるでしょ、あの橋を思い出してしまうわ。あれは確かルネッサンスだったと思ったけど。

相変わらず一日四回上演。でも、日中のやつはほとんどパパとあたしでやらなくてはなりません。今週はワルい犬の劇があるのですが、あたしが犬をどう思っているか御存じでしょう。誰かがW・C・フィールズに捧げた贅辞を覚えてる？ 「犬とガキの嫌いな人にはまだ救いが残っている」ってやつ。あたしが死ぬときにも、誰かこのくらい素敵なことを言ってくれるといいんだけど。もっとも、ガキは嫌いじゃないわ。犬と、一部の大人だけ。

今週はそれと腹話術師が出ています。あたしもショーに出させてくれて、人形の操作をさせてくれることもあります。ダミーはダミーと呼ばれるのが嫌いなのを御存じ？ 人形と呼んでもらうほうが好きなのよ。あたしには人形たちの気持ちがよくわかります。あたしだってダミーと呼ばれるよりは人形と呼ばれるほうがいいですもんね。その後で、客席から誰か男の人（主に兵隊ね）を舞台上げて、ひざに座らせて口をパクパクしてもらって、あたしが腹話術をするの。今週はもう二十五人の男をひざにすわらせてるわ。楽しいじゃない？ 出られるだけのショーには全部出て、皆、特に兵隊たちがあたしのことを気に入ってくれて。自分の女が野郎たちの間でこんなに人気があるなんて得意でしょ？

対蹠地での男の子たちの行動に関する完全なレポートを出していませんね。マリー・モナハンから手紙が来て、今じゃあなたの知らない秘密を一つ知ってるのよ。こう書くと見当がついてしまうかもしれないけど、あたしはしゃべってませんからね。あたしは秘密は絶対に漏らさない人です。

えーと、誰か別の人のことを聞くはずだったんだけど。ああ、そうそう、あなただわ。お元気ですか？ それと、大体においていい子にしていますか？ あたしはいい子にしてるわ、O favorito mio, Quanto te amo! 愛してるわ。あなたのモニカお母様も。あなたが帰ってくるまでは寂しいこの町も愛しています。メアリーが今週訪ねてきました。素敵な娘ね。少しはあたしにも伝染したようです。今ではあたしも素敵よ。

テレサ(ショウ・ポート)ピコーネ

七、

部隊は二度にわたって海沿いに北上した。一度に数百キロ。軍事のおよび海洋的冒険は本記録の扱うところではないが、海岸と海の小さな鉄の昆虫たちは大きなでこぼこした鳥みたいなニューギニア島を喰い上っていったわけだ。それから鳥の頭(フォーゲルコプフ)を後にして、七百キロほどむこうのオランダ領の島に向かった。そして再度腰を据え、何もかもほぼ元通りになった。

ケイシーとハンスは今では軍曹のテントにはいなかった。ケイシーは上層部とちょっとしためごとを起こして、営倉で四週間過ごしたのである。今はもう中隊に戻ってはいいたが、もはや軍曹ではなかった。週三回りハビリテーション講義を受けなければならず、あとは通常任務につかされた。

そしてハンスももはや軍曹ではなかった。許可なくして結婚したため、降格となったのである。ハンスは等級が下がってもまるで気に留めなかった。

だがケイシーは気に留めていた。なぜなら、今では軍歴にキズがついてしまったからだ。営倉入り、背信罪および反アメリカ主義、精神的不適格の疑いあり。「アメリカ的価値観の再認識」なる講義を受けなくてはならなかったが、これを教えているのがアカのスタインなのだった。さらに、「アイツとスタインはデキている」とかいう噂にも耐えねばならなかったが、これを流したのがあのひねくれ者のユーモリスト、スタイン自身であることも十分考えられることだった。だが、何よりも、彼はスタインに耐えねばならなかった。

スタインはマキャベリストではなかったが、ケイシーはそう思っていた。そしてケイシーは、まさに自分が治ったと思ったその時に、後で出てくる病に感染したのだった。スタインはケイシーにとっては良くない存在だったが、スタインは、自分こそケイシーくんが必要とする人間だと思っていた。そしてスタイン自身が必要としているものはようやく目覚めはじめたばかりだったのだ。

だが、しばらくして何かが起こった。すると世の中、少しは生きやすくなったのだった。

八、

今度の島は前の島々より緑っけは少なかったが、もっと明るかった。ジャングルはもっと密度が低く、ところどころには原っぱもある。もっと幸せな島で、人々ももっと幸せで肌は白くてもっとしなやかだった。そしてさらに、この新しい気分に寄与するある出来事

があったのである。

ある日、スタインが突然言い出した。「ケイシー、私は恋におちた」

「ゲゲッ、一体何と？」

「女性とだ。他の奴らも普通そうだろう。私だとそれじゃ異常かい？」

「ああ。おまえがツチブタと恋におちるならまだわかるけど、人間の女ではね。何族の女だ？」

「ケイシー、君が冗談好きなのはわかるがね、そいつはちょっとキツイぞ。白人女性だよ。今日彼女と出会って恋におちたんだ」

さてケイシーは、この島に白人の女性はいないことを知っていた。さらに、スタインの目が非常に悪いことも知っていた。だが、どういうことだ！ 近眼のスタインに白人女性のように見えたといったら、どんな代物か、はたまた生き物か？ その上、それは（あるいはもしそれが生き物で性別があったなら、彼女は）スタインにどんなしるしを返してよこしたんだろう。

ケイシーは答えを求めてでかけた。

ココナッツ・グローブではショーが掛かるところだった。スタインがいつもながらそういったことの責任者だった。豪州人たちも出演して芸を見せることになっていた。豪州人は芸など持ち合わせてはいないのだが、連中にはタニアがいた。タニアがショーに出演することになっていた。タニアは黄色い髪の豪州人伍長代理トミー・トラウンサーなのだ。彼は裏声が使えて人真似がうまかった。

「おい、ケイシーよ、あの牛乳びん底メガネのフクロウ野郎をはめたぜ」豪州人の一人が話してくれた。「最初はただトミーをショーに出したかっただけでさ、スタインに話を通さなきゃならないだろ。でさ、ガウンを作ってやってさ、ナオンに仕立ててオーディションに出したんだよ。スタインみたいなのは絶対ひっかからないと思ってたんだがなあ。いやあ、どうもジャングル暮らしが長すぎるようだぜ」

「なんか絶対ちがうぜ。そんなことはありえないよ。とはいえ、あいつ、ユーモアのセンスがある奴じゃないからなあ」ケイシーはこの点ではいささか間違っていた。

「ジョークじゃないぜ、だって、あいつのつかえるオチがない」ある豪州人がいった。

「はまったんだよ、料理されて、あとは喰うだけ。スタインには、こいつが某准将のレコで、そいつが卑しい目的で島に潜り込ませたんだってことにしてあるからさ。その准将が今でかけてて、タニアは男どもへのあいさつにショーに出たいんだって言ったんだ。そしたらスタインはさ、“唯一の方法はだな、彼女を女装してるだけだってことにして登録することだ” だってさ。“おおっ、凄いアイデアだ、あんたみたいな頭をした奴は二人といないぜ” って言ってやったね。“いやあ、それほどでも” とか言って、絶対秘密をバラ

さないうって宣誓までしていったよ。オレたちもこいつが女だって誰にも決して明かしちゃならないんだぜ。おい、ケイシーよ、あいつにゃこのスネ毛が見えんのかね」

「スタインはあんまり細かいところは見えんのだ。それに、男にゃときどき説明を超越したようなことが起きるもんさ。我々誰しもそれから逃げられん。ところで、お前ら豪州人ってのは一体何で身体を洗ってるんだ、羊の浸液かなんかか？」

「そりゃ香水の匂いだ。やっこさん、そいつに参ってるんだ。青春のエクスタシーとかなんとか口走ってたぜ。このトミーは良い女だって思いたいんだよ、あいつは。老いぼれ准将を悪者にしようってわけだ。だから、タニア、というかトミーに、待っていてくれだつてさ。これが終わったら、どこかすばらしい清潔な地で二人して暮らそう！」

「こおれで、局面一新だぜ！」ケイシーは叫んだ。「おい、カモの料理を手伝え。いや、是非手伝ってくれ。トミー、お前、どの程度つかえる？」

「ケイシー、ほかぁ世界一ですぜ。これ以上つかえる奴はいませんや」

ケイシーはトミーと連絡員を一人つれてオーストラリア分遣隊を離れ、自分を除けばこの島で最も賢い男四人の知恵を借りにいった。ダーティー・ファイブと二人の豪州人は、夜遅くまでかかって、スタインとその主人たちを玉座からひきずり下ろすための最もダーティーな計画を練り上げた。

下手をすれば国際問題にまで発展しかねなかった。そうなればただでは済むまい。だが、もしうまくいけば、こいつはスタインと、ひょっとしてあのかんかんの大佐と三人の激怒した少佐をもひきずり下ろせるかもしれないし、その見込みは確かにあった。その晩のうちにメインの作業は済ませ、後はケイシーが残り数日をかけてディテールをつめた。

彼はすべてをつぎこんだ。破廉恥な老いぼれ准将があの子を墮落させるなんてのは犯罪だぜ、それもあれはただの娘じゃない、めくらにだってわかる。それに、もしスタインが恋におちたにしても、彼以上に真の愛にふさわしい男がいるだろうか、いやしないさ。きたるべき清潔な世界での恍惚の生活を期待する権利は十分にある。特に選ばれた者は確実にいる、それに加わるために必要なのはあからさまな度胸だけだ。大事なのは、あの子の魂が清らかなうちに彼女をその准将から遠ざけること。いやあ、試すだけのことはあるとも。

スタインのコネで、あの大佐や少佐たちを介入させられないだろうか。手入れは考えたか？ その准将に道徳的なゆさぶりをかけてタニアをくにへ送り帰させたらどうだ。

「やれるって、アブサロム、絶対やんなきゃ」ケイシーは断言した。

「やるだけのことはあるな」とスタイン。「やらにゃ男じゃない」

ショーは大成功で、タニアがそのスターだった。実にリアルで、場内割れんばかりだった。連中、スネ毛が目に入らなかったわけじゃない。つまりは皆、ジャングル暮らしが長

すぎたということだ。

そしてショーがひけてしばらくしてから、タニアはスタインと密会だった。ダーティー・ファイブと豪州人の共謀者たちは歓声をあげた。トミーは、一人二役でも三役でもこなせるから、メガネの四つ目はちゃんと針にひっかけておけると断言した。自分は昔からの芸人で、才能があるんだという。何と言ってもこいつは世界一なんだ。

そういうわけで、一同は期待にうちふるえながら、後を彼にまかせたのだった。

何時間もたって、夜明けのだいぶ前、ジャングルから妙な生き物がはいずりだしてきた。そいつはメガネをなくしてしまったので、足元がおぼつかないのだった。泥まみれでボロボロだった。頭部には血が付着し、目ははれあがって真っ黒で、ほとんど開かない状態だった。

ケイシーは悲しみのうちに、それをベッドに運んだ。というのも、その生き物はスタインだったのだ。つまり、陰謀はトミーの癩癩という岩のために難破してしまったということだ。ケイシーは詳細を調べにいった。

「いやあ、ありゃどうしようもなかったんですよ、ケイシー」トミーは言った。「あの野郎は気がおかしいんだから。つまり、あいつは未来の世界とやらを、昨日のうちにモノにしようとしたんです。それが見かけによらず結構力が強くて、それになんかゾッとさせられますよ。こっちがパニックに陥るくらいだから。とにかく不気味で、背筋が凍るような調子っぱずれの笑いかたするんですぜ。だから木に叩きつけて、どろ沼に蹴りこんでやったんです。しょうがなかったんですよ。」

でも、やっこさん、とうとう気がつきませんでしたぜ」

突然、希望がわいてきた。「なんだとトミー、気がついてないだっけ？ まだバレてないのか？」

「ええ。あいつは何も知りゃしません。あんだけとち狂ってるって何もわかりませんよ」

ケイシーは怪我をしたスタインのところへ戻り、ちょっとした外科手術といささかの手荒さで彼の息をふきかえさせた。

「おいアブサロム、しゃべれるか、どうだ、何があったんだ」

「ああケイシー、彼女はすばらしいよ。あの娘は白雪のごとくに純粹で、私が卑しかったんだ。怒った彼女は聖なる炎にあふれている。あの強さは人間離れしている。いまでは十倍も深く彼女を愛しているんだ」

「バカ野郎、それなら血なんか流して寝っころがってるんじゃないやねえよ。こうなったらとにかく急いで速攻しなきゃ。例の准将が今朝戻って、今、この瞬間にもあの娘をむりやり呼びつけようとしてるに違いない。おい、大佐と少佐たちに連絡して、あの准将はファシストのスパイで、思想的対立のためにお前をフクロにしたって言うんだ。奇襲捜査で奴の

道徳的墮落の罪を明らかにして、報復するように進言しろ。あの老いぼれ准将は、これまで一度としてジョークに……じゃなくて、つまりだな、大佐たちの考え方にまっこうから対立している男だからな。このことはもう話してあるんだろ？」

「ああ、ほとんど合意寸前まで話がついてる。ちょっと合法性とかで足踏みしていたんだが、証拠さえ出ればどうにでもなるそうだ。君の言うとおり、非常に関心は示していた」

「だったらすぐいけ、速度が肝心だぞ、スタイン」

こうして、嘘みたいな話だが、反撃は行われ、その結果たるや凄まじいものだった。両国の友好関係が傾き、島は地震のように揺れ動いた。

豪州人の准将は最初戸惑ったようだった。「ここに女がいるというなら、誰か処罰されねばならんな。そんなことはまるで認められてはおらんのだから」

だが、有罪ということになっているのが他ならぬ自分だと気がつく、彼は非常に怒り、どういうことなのか島の全土に調べをだした。手入れ部隊が理由もなしに、あんな具合に同盟軍の准将をガサ入れするものか。

アメリカ側の准将はまったく寝耳に水で、説明を求めた。そして何も得られぬまま、血を求めてわめきながらジャングルのなかをうろつきまわった。

スタインの肩章の青い星が一時地におちた。三人の激怒した少佐たちの小さな赤い星が轟音とともに沈んだ。そしてレイチェック大佐の星は、稲妻のごとく泥にまみれたのだった。

この話には脚注がついている。何年もして、ハンスから出た話だ。それによると、スタインはそこまで近眼ではなかったという。実のところ、かなり長期的な視点を持ちはじめていたらしい。あの黄色い髪の豪州人伍長代理なんぞにはいささかもだまされなどしなかった。スタインには、ジョークが彼方からやってくるのが見えたのだ。彼こそが、このジョークを考えついてそれを仲間の頭にふきこんだ張本人なのだ。そうして後はそしらぬ顔をして道化師の役回りを楽しんでいたのだった。

スタインがケイシーにカモられたのではなかった。彼がケイシーやその他をカモったのだ。そしてあの奇妙な密会で、トミー・トラウンサーをたっぷりおどかしてやったのだった。あの状況におけるジョークは何層にもなっていて、回顧するにつれて可笑しさは増すのだ。もっとも、トミー・トラウンサーがあればほどキツく殴れると思わなかったのは確かだ。

スタイン自身、あの大佐や少佐にはうんざりしはじめていた頃で、彼らをあのジョークのカモにできることに気がついたのだ。ケイシーが自分の考えだと思っているあのジョークは、スタインが糸を引いていたのにほぼ間違いはない。だが、ダーティーファイブの中でそれがわかったのはハンスだけだった。あとの四人は疑ってみることすらしなかった

のだ。

そうかな？ そうかな？ ホントに疑いもしなかったのかな？

九、

「我ら故郷では異邦人、
我らエリン（アイルランド）にては追放者」
オグナイブ。

「子供の頃、」とフィネガン、「ぼくはイタリア語のある読本を持っていた。まだぼくがイタリア人で、アイリッシュに変わる前のことだ。そこに載っていた話で、確かスペッチエット、つまり小さな鏡とかいう題のがあったんだ。男の子が、鏡の中の少年をかわいそうにおもうんだ。自分がのぞいてあげないと、少年は顔がないからというのでね。それで男の子は、魔法を使って、自分の顔を貸してあげようって言うんだ。

すると鏡の少年は出てきて、もとの男の子の顔だけでなく、影と名前も借りてしまった。そして、借り物なのに、二度と返そうとはせず、不正直に自分の物にしてしまったのです。最初の男の子は今でもこの世の暗い片隅に座ったままで、誰一人、それが男の子であることすら知らないのです。男の子に見えないからです。彼は、どんなもののようにも見えないのです」

「いずれにせよ、その男の子はお前じゃないさ。顔はともかく、鼻だけは残ってるもんな」とヴィンセント。

「いや、ぼくなんだよ。ぼくは顔の代わりにマンガのお面をつけていて、名前のかわりにあだ名がついている。ぼくがおとす影は、実は影じゃない。ただの、影のそのまた影なんだ。これまで出会った人々は、確かに人々のようだ。だけどぼくには自分が人のようには思われない。親父のようなイタリア人じゃないし、おふくろみたいにアイリッシュでもない。先祖をもたない取り換え子だ。自分の生まれた街の様相を見ても何も感じない。故郷の町や道を歩いていると、狐につままれたみたいだ。これがぼくの世界なんだろうか、それとも別の世界があって、ぼくが間違っただけに転がりこんでしまったんだらうかってね。一人でいると、自分が無能なオバケで魂をどこかに置き忘れ、その搜索を運命づけられているような気がしてくるんだ」

「そして己のペルソナを求め、フィネガンくんの冒険はどこまで続くのでしょうか。ではまた来週、この時間にどうぞ！」とケイシー。

だが、翌週もフィネガンはペルソナを見つけることはできなかった。

十、

「つまりだな、何一つ確実ではないんだ。世界は十分前に創造されたのかもしれないんだから」とヴィンセント。

「今の、もう一回いってみよう」とヘンリー。

「万物の創造はだな、たった十分前に行われたばかりかもしれない。宇宙は遠くの光に予め赤方変移を組込んで創られ、モーメントは加えられて生命も途中まで経過した状態で、時空はある程度拡大し、また拡大しつつある状態で創られたのだ。地球は化石や遺跡を埋め込まれて第四洪積氷河期からの下り坂の途中で、C14や原子時計も途中まで進んだ状態で創られた。堆積物は十五億年の時の流れを示すように創られ、昆虫や雑草も、今のような進化の位置で創られた。地上の二十五億の人間の頭脳は、これまでに起きたこともないようなことや、みたこともない夢の記憶をしわに刻まれて創られたのである」

「もっと目新しいことかと思えば」とケイシー。「そんな説ならとっくの昔に……」

「あることが以前に唱えられたことがある、というのは、それが間違っているという証拠にはなり得ない」とヴィンセント。「かつて、スラムに浮浪者が二人いた。一人がこう言った。『立ち直んなきゃ。立ち上がって、身ぎれいにするんだ。多少は働くことになっても、自立しよう、そうすれば新しい展望が開けるかもしれない』すると、もう一人がこう言った。『うんにゃ、そんなことはもうやってみた奴がいる。ぜんぜん目新しくない』こうして二人は、目新しくないからというだけで、そのままに終わってしまったのだ。これは長子相続制から来る恐怖と言うべきであろう。そして己を最も大胆であると称する物こそ、実は最もこの恐怖に怯えている者なのである。つまり、俺は違う。私はこれまで、象の足跡をまたぐことを恐れたことなどない。また、歩調をあわせ……」

「やれやれ、付き合いきれんわ」とヘンリー。

「古いノスタルジアと新しい愛、借金と罪の徴が十分前に創られ、心を苦しめる恨みつらみは実は決して起きなかった出来事に基づくとしてみよう。書物は完全に印刷された状態で創られ、それに対応した影響が様々な人心の中に刻まれたとしよう。朝刊もこの午後に作られ、そこに記された優勝争いや昨日の試合は実はまったく行われたことはなく、バッターたちはバットに触れたこともないのに、スランプのさ中に産みだされたのだ。うん、この理論、どこにも穴はないな。これが真相なのかもしれない。理論にはこれ以上の判断は下せないものさ。

「おや、昨晚のヤシ酒の飲みすぎで二日酔いを持ったまま創造されたフィネガンじゃないか。もっとも昨晚もヤシ酒も実在しないんだけど」

「そーいあ、確かに昨晩はちょっとおかしかったなあ」とケイシー。

「だれかもっといい説明が考えられるか？ これをストラナハンの非創造的創造論理と呼ぼう。これがすべてじゃない。影と実体のモチーフをめぐるくだりもあるんだけど、お前ら聞いてないから話してやんない」

「君は間違ってるよ、ヴィンセント。だって、すべてはまだ起こってないんだから。この世はまだ始まっていないんだ。あと十分か、あるいは寿限無だったら始まるかもしれないし、いつまでたっても始まらないかもしれない。何度か、始まったんじゃないかと思っただけのことだったけど、間違ってた」

「俺にとっては始まっているね」固執するヴィンセント。「この世はエリートのためだけに存在できる。この世界はたった一人のエリートのためだけに存在しているんだ。すなわちこの俺のために。俺にとっては存在しているけど、残りのお前らにとっては存在していない。要するにだ、お前たち誰一人として実在しちやいなくて、俺は意志の力によってこの場に存在する」

だが、一同の中で自分の非実在性を本気で心配しているのはフィネガンだけだった。

十一、

この日々、ハンスはパワーにあふれていた。永遠に続くかのようなツキと幸福の時期に入ったのだ。許可なしに結婚したために降格処分となったこと、かつては軍曹だった中隊で今は下級兵であること、妻は遠く離れた異国人で自分はへんぴな島にいる兵士でこの先二度と会えない可能性もあること、そんなことはかまわななかつた。何事も彼を落ち込ませることはできなかった。

ハンスは世界を思いのままに操り、魚と戯れるように世界と戯れていた。もっと早く釣りあげることでもできたのだが、もて遊んで楽しんでいたので。だから彼は他の誰も登れないような崖を登り、誰も会ったことのない民族を発見したのである。

崖の民と出会うについて、ハンスは他人より可能性があった。ハンスはあらゆる民族を見つけることができたし、皆に受け入れられた。フィネガンはいつも、崖の民は謎の雪男のようなもので嘘つきだけが会えるのだと言っていた。フィネガンならこれにあてはまっただろうが、彼は自分がその謎の民に見いだすであろうものを恐れているようだった。そしてこの日々、ハンス自身かなりの嘘つきだった。だが、彼は本当に崖の民に会ったのであり、一緒に食事もして、話もするようになった。彼らはタロイモとベタベタした物と肉を食べた。肉はクスクス(フクロネズミ)かココナッツ・オポッサムの時もあり、鳥肉の時もあった。そして時には、それが非常に奇妙な味のするわけのわからない肉であったこ

とをハンスは匂わせるのだった（コラ、ちゃんと聞いているのか？）

「ハンス、そりゃでっちあげだ。まっとうに人肉食の話が出来たのはメルヴィルで最後。彼ですら、多少はでっちあげの気があったんだから」とフィネガン。

ハンス曰く、「人肉食ってのは平凡に過ぎるね。我ら加入者といたしましてはネクロファジスト（死体偏食者）と呼んでいただきたい」

「それならまだましだ。お前のことだから、生きたまま喰ったのかと思った」

だが実のところ、ハンスはなぜフィネガン（他に崖を登れたかもしれない唯一の者）が崖の民に会うのを恐れているのかわかっていた。崖の民はフィネガンとそっくりで、同じような馬鹿でかい鼻を持ち、同じようにアゴなしで、同じ頼りないふらふらした歩きかたで、同じ唐突な素早さと強さを持っていた。彼らが何の末裔であるにせよ、フィネガンもその一人だった。百人ものフィネガンそっくりの褐色の男たち！ 百人ものフィネガンそっくりの女たち！ それでも彼ら、ちっともみっともないのだ！

ハンスはスーレムという友人を持っていたが、彼は浜の子で、陸の子ではなかった。スーレムは重い黒木の固まりを持っていた。彫像を彫っていたのだ。実は彼は工兵トラックの電動工具が使いたかったのだが、それをいきなり持ち出すようなことはしなかった。今日はナイフを研ぎに、翌日は仕上げにやすりや棒やすりを、と、徐々に来た。

「だけどね、本当は何がしたいかって、あれを電動ろくろに乗せて作業したいんだ、ハンス。五分でも使わせてもらえたら、一月分の仕事が助かるし、一日使えれば……」

「それじゃぶちこわした、スーレム。一日使えば十二年分の仕事が助かるだろう。でも、そうしたらお前の作品は原始的じゃなくなっちゃう」

「何言ってるやがる。何で原始的じゃなきゃならないんだ。原始的に見えりゃ十分なんだよ。こうしよう、ハンス。おれたち、十通りの彫像を用意するんだ。そしたらお前のところに木の固まりを持って来るから、ろくろと電動のこでの大雑把な作業はお前がやってくれ。一日百はこなせるだろう。そしたらおれのおじさんたちが仕上げで絵を入れるから。売り子をやってくれる女の子たちはあてがあるから、この部隊で売らせるんだ。もうかるよ」

だが、これは成立しなかった。ある島で同様のことが行われ、小彫像は質が落ちてしまったのだ。ハンスが断ったのは正しかった。ダーティー・ファイブはスーレムと共に生産作業に入りはしなかった。だが、やすりや棒やすりやのこぎりは使わせてやり、スーレムは彼らそれぞれに怪物を作ってくれた。彼が最も真剣に取り組んだのが、〔フィネガンのおじいさん〕というとても小さい御守りだった。

これについて、スーレムはハンスだけにこう説明した。

「あのフィネガンという子だけど、彼にはトゥジュアンがないんだ。ないってのは非常

におかしなことだ。この世の表皮は、持ってる奴にすら薄すぎる。まして、持っていない奴はどうしたって表皮を踏み破って、永劫におっこちるはずだ。おれたちがある人間を真に見ようと思えば、タイの葉をかんで第二の目を得る。すると、その人が固有の光に包まれているのが見える。お前らの言葉で何というかは知らない」

「オーラ」とハンス。

「オーラに包まれているのが見える。オーラを見れば、トゥジュアンの指向性がわかる。だけど、あのフィネガンにはどっちもない」

「そういえばあいつ、自分には影がない、あるのは影のそのまた影だけだって言っていた」

「その通りだ。あいつには欠けてるんだ。あいつは人間じゃない。知ってた？」

「一部違うことくらいはね。お前のいうトゥジュアンってのがわからん。魂のこと？」

「いや、ハンス、それはセマンガット。魂、セマンガットの無い奴はいないし、トゥジュアンのない奴もほとんどいない。トゥジュアンは、お前がどこかに行かされる時、お前に命令が出たときのように、お前とともにある。命令それ自体、指向性、行くべき場所だ。お前がこの世にある人生の目的で、全部クスクスの皮でできた皮紙にしっかり記され、小石のようにしっかり丸めてある。ある者は、それは脳の中、大脳葉の下に置かれているという。ある者は身体の統治者たる肝臓に置かれているという。おれ自身は、魂の座である横隔膜に置かれていると思う。だけど、あのフィネガンだとどこにもないんだ。彼には指向性がない。指向性がないくせに何で迷わないんだろう。トゥジュアンが与えられていないんだ。

大体いつでも神様はそいつを与えるんだ。でも、たまに忘れる。フィネガンのときは忘れたんだ」

そこでスーレムはフィネガンのおじいさんを作った。「ハンス、」とスーレム。「あの子にはホントにおじいさんが必要なんだ。分裂しちまってる。あんなにおじいさんを必要としている子は初めて見た。あの子はやっかいなことになるぞ、彼を救えるのはこれしかないかもしれない。あいつは破滅への道を歩んでる。その破滅を最期のところで何とか騙らかしてやらなくちゃ」

「でも、ぼくのおじいさんがどんなふうかなんて、どうして知ってるんだ？」これを伝え聞いたフィネガンは尋ねた。

「そいつはだな、フィネガン、おれが夢に見るしかない。おじさんたちもおれが夢に見るのを手伝ってくれる。それが済めば、あとは苦労ないさ」

あまり苦労したようにも見えなかったが、それはフィネガンのおじいさんのようには見えなかった。一部トカゲで一部ヒキガエルのようなようだった。きれいではなかったが、しっか

りした目と様々な性格をもった、こう、忌まわしい完全さといったものだった。

「スーレム、ありゃあ、ぼくのおじいさんじゃないよ」フィネガンは固執した。「確かにおかしなかつこうはしてたけど、うん、ありゃあどう考えても違う」

「いや、そういうふうなおじいさんではないんだ、フィネガン。でも、もう一つの言葉を使わないのでおじいさんていう言葉を使ってるんだ」

フィネガンはコップに水を汲んでくると、それに洗礼を施してヘリオガバルスと名付けた。そいつの首に、魔法のメダルをつけた鎖を巻いた。は虫類じみたあのローマ人をキリスト教徒に仕立てたのだ、と言った。

ヘリオガバルスは抜け目のない怪物で、この世における目的と居場所を持っていた。フィネガン以上だ。ヘリオガバルスは最後の最後までフィネガンとともにあった。そして、死体の所持品として発見されたときには、別の宗派のものだと思われたのだった。なぜなら、フィネガンの最期は別の類いの島でのことだったから。

この日々、ハンスは物を登るといふ元気の出る夢を見るのだった。何種類かあった。矢の雨の中、崖を登るといふ夢、銃弾の中、ビルの壁をよじ登る夢、空にかかった大きな鉄のはしごを何千メートルも登る夢。そして、洞窟のでこぼこしたたて抗を、何千メートルも上に日の光を見ながら登ってゆく夢。

この最期のやつは巨大なクモの網を登ると抱き合わせだった。網の糸は太さ二十センチのケーブルだった。登りは実に長く、たて抗の底は豆つぶほどに小さくなり、やがて網の中心に達するずっと前に消失してしまった。

巨大なクモの赤い目玉は機関車のヘッドライトのように光った。そしてクモが動くと、網全体が雷のように揺れた。それでも、そいつをやっつけるしかなかった。巨大なクモと格闘したことのない多くの人、それがどれほど勇気のいることか知らない。ハンスの手にしている剣はローマ式だった。これは奇妙に思えた。なぜかという、クモのほうは明らかにもっと古い、ギリシャかヒンズーの神話のものだったからだ。クモの脚に生えている毛は、ほとんどの木よりも濃く茂っていた。そこが巨大クモ殺しに手をつける場所として正しいにせよ間違っているにせよ、どこかから手をつけなくてはならない。

鉄のはしごを登るのが一番良かった。ここでの危険は、その非常な高さもたらすだけだった。このはしごは雲をつきぬけて地球が見えなくなるまで続き、(ヴィンセント理論によれば)一瞬前に飛んでいる状態で創造されたばかりかもしれない、最も高い島を越えて続いていた。黄金の鷲がハンスの周りを旋回し、離脱してゆき、そしてはしごのてっぺんも根元も見えず、ただ上にも下にも空があるだけだった。これが完成というものだ。達成というものだ。

ハンスは鉄のはしごを太陽目指して登っていった。ハンスはアポロだった。

十二、

一同は別の駐屯地に来ていた。ルソンにいるのだ。途中、幾つか島を通りすぎて、ハンスがそれについての話をした。

「あれが支那人が燕の巣のスープ用の燕の巣を調達するところだ」と彼は語った。「世界でここだけ。ずっと昔からの商品だ」

「あの島々に木なんか一本も生えてるようにはみえないけど」とフィネガン。

「おぬし、ジョヴァンニは、実にまっとうな男だ。お前がそう言ってくれるのを期待してたんだ。その通り、あの島々には木一本、草っぱ一枚たりともない。なんでもあそこは火星のようなんだと。両方に行ったことのある人から聞いた話だ。植生は痕跡程度。島々は珊瑚礁と石灰石でできている。ここには海鳥がやってきて巣を作る。自分の排物と嘔吐物でね。連中は魚を食べまくって、それから、芯にする石灰石を少し食べる。それからそれをもどして、広げて固まるのを待つ。それを繰り返す。こうやって鳥たちは巣を作り、支那人がそれをスープにするんだ」

これはタラウド諸島で、北緯四度。

日が沈み、月が出て、海上で最も美しい夜を照らした。誰の心にも、その美しさ故に他の夜から抜きんでて記憶されている一夜がある。ダーティー・ファイブの面々は、(一心同体であるが故に) 皆、ずっとこの夜を記憶し続けるだろう。

彼らの航跡は燐光を發し、後方で明るい緑のしっぽのように広がっていった。大洋はヨードの匂いがした。彼らは全員上部甲板で寝たが、ケイシーだけは別で、炊事場でこき使われていた。そして、真夜中を過ぎると炊事場の奴隷も上がってきて一同に加わった。「アルゴという名の船だ」とケイシーは言った。「少なくとも、今夜だけは。」ケイシーは一同の中の詩人だった。

戦争はもう終わって、夜中に甲板で煙草を吸ってもよかった。

十三、

ルソン島では、何もかもこれまでになく良かった。任務はなく、いつもの怠惰、そして帰還の船が来るまであと一月足らず。みんな、仲間を出掛けるようになり、なかでもフィネガンはちょっと度が過ぎるほどだった。

ある朝、ハンスは言った。「そんな真っ赤な代物二つのを持ってるくらいなら、いっそ目なんか無いほうがましなんじゃない？ まともに見える？」

「うん。多少は」

「こっち側から見ると、ガラス玉にしか見えないぞ。誰がお前を運んできたんだ？」

「ヴィンセント」

「このままここに埋葬してやろうか。もう長くないようだし。どうだ、問題あるか」

「あんまり」

しばらくして、ヴィンセントとフィネガンはジャングルに戻り、二人を潰した酒を探しに出た。犬も歩けばなんとやら。掘っ立て小屋を作っている女の子が二人いた。

「これ、何になるの？」ヴィンセントは二人に尋ねた。

「キャバレー。アメリカ・スタイルのキャバレー」一番小さい娘が言った。

「いつ出来上がる？」

「あと一時間。丸一日かも。いつ出来上がるかなんて、そんなこと誰にわかるもんですか。最初のお客のあんたたちが来たから、もう開店。中に入って座んなさいよ」

「『中』って、壁もないのにどこが中なんだ？」フィネガンが尋ねた。

「あのおっきな箱と、小さな箱が二つあるとこ。あれがテーブルと椅子。あれが中。あとで箱は追加するかも。わかんないけど」

「飲み物は何が？」

「えーと、四枚羽根。五つの薔薇」本当にそういう名のウイスキーだった。マイルドだった。

「君たち、名前は？」ヴィンセントが知りたがった。

「ファロとナウティ」と小さいほうの娘ファロが言った。「こちらは？」

「ヴィンセントとフィネガン。鼻がフィネガン」

「このフィネガン、ヒトじゃない。タオ・ブンドゥクよ。山の生き物、もっと古い生き物。笑うね、ヴィンセント。いや、ほんと、おたくの友だち、ヒトと違うよ。なんか別のもの。知らなかった？ お話に出てくるでしょう」とナウティ。

若人ヴィンセントと、若い生き物フィネガンは箱に腰掛け、女の子たちが働くのを眺めた。掘っ立て小屋を作るなんて簡単なようだった。ファロは、五つの薔薇を割る水をカンに入れて持ってきた。ヴィンセントは娘の腰を抱こうとしたが、はねつけられた。

「さわる、ダメね、この小僧が。二度とするないよ」

フィネガンはタガログ語をしゃべろうとした。ハンスやケイシーに話せるんなら、このぼくにだって。

「Magkaano ito？」

「それほどでもないわね。おたくらが最初の客だからねえ。ボトルーベソよ」ナウティが答えた。

「Ano ang ngalan no？」フィネガンは尋ねた。

「言ったでしょう。あたしはナウティ。ファロはファロ。何できくの？」

「他にはこの文しか知らないからだよ」

「いつかちゃんと話せる教えたげる。言葉、全部」

「このキャバレー、音楽は入れるの？」

「もちろん。ボタンガにいるおじさん、車があれば土曜にピアノ持ってくるよ」

「誰が弾くの」

「あたしが弾く、ナウティが。ファロは才能ないわ。うちにはハーブがあるけど、ハーブでジャズやるの、難しい。それに男たちがいじりたがって壊しちゃうかも」

「トランプある？それとも、ここじゃ禁止してないだろうね？」

「取ってくる。ええ、何も禁止ない。青空天井よ、おたくらが言うように。ところでこれ、どういう意味？ ほれ。クラブの4とダイヤの6だけは欠けてるから。それでこの黄色の紙がクラブの4。『これはクラブの4です』って書いてあるの。ホラ、英語でも書いといたげる。それとこの白い紙切れがダイヤの6ね」

「ひえー、二か国語トランプ！」

ヴィンセントはしばらくソリテアをやっていた。フィネガンはずっと気分が良くなっていった。今では新たな落ち着きを持ってウィスキーをチビチビやることができた。あの目に来た酒を見つけたが、記憶にあるよりずっと軽くてマイルドな酒だった。

「朝の九時前に死んでなければ、その日は死なないってことだ」とフィネガン。「長時間生きて一日を終えられる。喰うものある、FちゃんNちゃん？」

「バナナだけ」

「Magkaano？」

「一ダースーペソ。おつりがないから、何でも一ペソにするしかないの。それだと高すぎる物もあるし安すぎる物もあるわ。もっと払わなきゃ気がすまないって人も多いのよ、おたくらもそうでしょうね。それで踏み倒される分の穴が埋まって、それとチップをくれる人もいるわねえ。音楽の後でつぼをまわすわ。バナナは原価タダで、一ペソ取れるの。これがいわゆる商業ってやつね」

女の子たちも一緒に木の株に座り、全員が知っていた唯一のゲーム、刑ドロをやった。いつもファロが勝った。「子供の頃からずっとこのトランプ使ってきたから、カード全部、良く知ってるのよ。ポーカーやったら役にたつわね。ポーカー覚えて、もしこの古いトランプを使わしてもらえたら、男なんか全部やっつける」

「だろうね。でも、やっぱり、ポーカーは絶対しないほうがいい。君の手は全部目に出ちゃってる」とヴィンセント。

「えー、ウソ、ホント？ 光学、よくわからない」

「光学の話じゃない」
やがて、男二人はトール・ツリーへと出発した。
「一度さよなら」ファロとナウティがこう言った。
「なんで『一度さよなら』なんだ？」
「もしあたしたちが『ずっとさよなら』と言ったら、それはあんたたちが戻ってこないってことだから」

十四、

その夜、ダーティー・ファイブは全員バツファロー・バーにいて、共にいたのがグイテレット船長だった。船長はタガログ人だった。タガログ人特有の若い風貌で、二十三くらいのはずだが十三オに見えた。皆からはサミーと呼ばれ、いい友人だった。

「この歳云々ってのはナンセンスだらけだ」とサミー。「個人の歳に限らず、民族の歳も。一番のナンセンスはあの古代オリエントってやつだ。オリエントはとても若い。古いのは西洋の方だ。確かに、支那人は歴史を誇ってはいる。だけど、あいつらの歴史はまがいものだ。ヴィンセント、お前らアイリッシュが伝説の祖先ミレジウス王以来の伝統を誇るみたいなもんだ。東洋では、我々は自分の過去や遺物を本当は覚えてはいない。つまり、本当の我々の過去ではないんだ。誰かよそのものなんだ。でも、お前たちは古くて、生まれたときから古い。毛だらけの旧人だ。

おれはお前たちが我々より賢いとは思わん。お前たちの学習が早いとも思わない。だが、お前たちは生まれつきいろいろ知っているのだ。そして、生まれたときの後ろだてがある。それとお前ら、皆アル中の群れだぜ。一緒にいるとおれまでアル中だ。半端なセクターボを持ってるんだ。なんとか二ペソにならんか」

なった。黒ラベルをもう一本追加。

「酒飲みは西洋のほうが盛んだ。お前らがそんなに飲むのは、日常楽しくやっていないからだ。ところで、お前らのとても近い友人と知り合いになったぞ。彼が何でお前らと一緒にのところを見ないのか不思議に思ってたんだが」

「誰だ？」とヘンリー。

「アブサロム」

「ウゲェッ、スタインは勘弁してくれ」ケイシーがうめいた。

「そう、そのスタインだ。おれが会った最高の紳士。真面目で、熱意があって、とても親切で、おれは何故かソクラテスがあんなふうだったんじゃないかと思ってる。彼が学校で成人向け講義をいくつか持っているのを知ってる？ちなみにおれもそこで教えてる」

「サミー、そりゃあ駄目だ。スタインはよくない」

「ことに彼を信用してないのが、ケイシー、お前だって注意してくれたよ。予言者はし
かるべき尊敬を受けるものだが、自分の所属する集団では別だ、ってさ」

「もっと楽しいことを話そうぜ、放火とかさ、暴行とかさ」

「そういうのはあんまりないよ、ケイシー。もっとも、街ではちょっとやっかいがある
みたいだが。あんまり発展してほしいとは思わないが、それでも魅力は感じるな。映画の
中みたいにさ」

そうして一同は飲んでしゃべった。

「ボトルが空で、皆すっからかんだ」とハンス。

「案ずるでない、我が友よ」サミーがなだめた。「ペてんのやりかたを見せてやろう」

サミー船長はテーブルの上に帽子を脱いだ。帽子がないと、彼はただのスーツを着たあ
せた日焼けのフィリッピン少年だった。サミーとフィネガンは個別協議を行った。そして
フィネガンはハーモニカを取り出すと、靴磨き少年たちの後ろにまわった。彼が演奏する
と、少年たちはそれを聞いて眺めた。「赤い河渓谷」を演奏すると、それを眺めた。「ア・
ラング・ダング・ドゥー」を演奏すると、それを眺めた。そしてサミーは、彼らが眺めて
いる間に靴磨きの箱を一つかさらった。そしてそれを持って行ってしまった。

フィネガンは「ずっと向こうの山中で」と「古い九十七号の遭難」を演奏した。「ワバ
シュ・キャノンボール」を演った。かなり長いこと、そう、十五分ばかりも演奏していた
だろうか。サミーが戻ってきて、靴磨きの箱を少年たちの後ろに戻した。それからテー
ブルに戻ってきた。

「四足磨いて四ペソか。なんでアメリカ人は靴を磨かせるのに金を出すんだ？」

フィネガンも演奏を止めてテーブルに戻った。

「もっと演ってよ」と靴磨き。

「今はね。また後でな」もう追加のウィスキーが来ていた。

「放火なし、暴行なし」とヘンリー。「こいつはもっと越えた芸術だ。ペてん師サミーに
乾杯！」

「乾杯！ おれのほうがガキどもより靴磨きはうまいし、友人の渴きを見ているのは辛
いからな」

一同はその夜、盛大に酔い、それもかなり長続きした。ハンスは白馬が二頭いる放牧場
を知っていて、それに乗りたがった。放牧場まで二キロ弱。サミーは最期の二ペソでボト
ルをもう一本買って持ってきた。

道々、彼らは歌をうたった。六人は腕を組み、道一杯に広がって歩いた。大した道では
なかったが、脇の溝に押し込まれるのを嫌がった兵隊の一群とちょっとけんかになった

が、ハンスとヘンリーが反対勢力を黙らせた。鼻血を出したのはケイシーだけだった。

「まだよかったな、鼻血がケイシーで。これがフィネガンだと、だいぶひどかったであろう。ケイシーの鼻じゃあ心配には及ばん」とヘンリー。

一行は道を外れ、ジャングルの中を騒々しくぬけて放牧場に出た。そして放牧場には白馬がいた。ハンスはその中の最大の馬を追い掛け、つかまえた。たてがみを両手でつかまえ、かかとで蹴りを入れながら馬を振り回しているようだった。酒が入るとハンスはとても強かった。でかい馬にまたがって、暗闇の中、低い枝で自分の身体がばらばらにちぎれそうになるまで乗りまわした。幸せだった。皆が幸せだった。まだ鼻から血をしたたらせているケイシーでさえも。

(サミーの靴磨きとウイスキーのぺてんや、道でのけんか、白い種馬の捕獲と騎乗などこういったすべては、アルゴノートたちとその仲間の成すべきこととして定められた英雄的行為なのだった。)

高い草の中に座って一同はしゃべり、歌った。それからハンスは放牧場を駆け横切り、また馬を捕まえようとしていた。だが、今度はさっきほどしっかりしておらず、素早くもなかった。

サミーの目もとろんとしてきて、ちょっとした鼻うたをうたっていた。フィネガンはまたハーモニカを吹いたが、これもまた、余り安定しているとは言えなくなっていた。ヘンリーは両手を枕に横になって、星に向かって微笑んだ。最後の酒びんを空けた。草に座り、輪になって楽しくまわし飲みをしたのだが、誰も立ち上がらなかった。サミーが眠りに落ち、それからヴィンセントだった。ケイシーはしゃべりながら眠りに落ち、寝ながらも数分ごとに二言三言しゃべっていた。

ハンスとヘンリーとフィネガン(最後の生存者たち)はおかしな三方握手を荘厳に取り交した。ヘンリーが、世界に三人で立ち向かうことについて何か話した。「三者の集うところ、王国の三人分減じたる」とハンスが引用した。ダーティー・ファイブの核心に秘教的なトリオが生じたかのような、真面目な儀礼であった。

最後まで起きていたのはヘンリーで、彼がボトルを空けた。それから彼は話し始めたが、それは自分に向かってではなかった。

「お前の物になるのなら、これだって諦めよう。お前が冷酷でないなら。かわりにお前が貰ってくれるなら、色々なことを諦めよう。だが、結局のところ、お前次第だ」

ヘンリーは自分の使命について話していたのだ。そして横になって寝た。

六名はジャングルのへりにある小さな牧場の背の高い草の中で横になり、近くでは白馬が二頭立ったまま眠っていた。

十五、

スタインは最近、新約聖書を読んだ。休まず一気に最後まで読みとおした。どんな本でも彼はそうやって読む。前から読もうとは思っていたのだ。ずっと前に、あらゆるものを読むという作業を己に課したためである。

「これが見過ごしにされてきたとは驚きだ」とスタインは独言ちた。「こいつは重要な書物だ。マルクスやフロイトと並び称されるべき書物だ。もちろん、あらゆる偉大な書物はユダヤ人によって書かれているわけだものな。とはいえ、出た当時はきつい扱いを受けただろうなあ。キリストは非常に洗練された都会風の社会に生まれたのに、この書物は荒削りだ。実際、旧約よりもプリミティブなくらいだ。この世ならぬ雰囲気がやたらに漂ってる」

興味はおぼえたものの、いささか判断を保留したところもあった。今でもその多くは残したままである。

十六、

一週間後、大晦日の夜、夕食のすぐ後、彼らはトラックに乗せられてマニラに入った。そして深夜直後、一同は故郷へ帰るため船に乗り込んだ。

第3章

名前を考えて

一、

「サルヴァトーレ」

「ヘンリー・F」

「シュルツ」

「ジョン・G」

「スツィマンスキー」

「カシミール・W」

「ストラナハン」

「ヴィンセント・J」

「ソッリ」

「ジョン・F」

(ここらあたりでちょっとした混乱があった。)

受けこたえがこの通りにいったか保証の限りではないが、こういう具合にいくべきなのだ。チェックリストにはこういう具合に載っていた。何が起こったのか、誰にも定かではなかった。ダーティー・ファイブの五十音配列に別の子が入り込むことはよくあった。ときどき、間に割りこむようなサ行の兵隊が部隊にいたのだ。今の場合にはしかし、一人多すぎるというよりも一人足りないようだった。

点呼の士官が姓を呼ぶ。兵士は名前と間の頭文字を答えて、袋を肩に背負うと棧橋を渡り、はしけに向かい、その間にチェックされる。だが、はしけに乗っていない者がいた。兵の一人が列からはずされたのである。

MP曹長が、しばらくその男に向かってぶつぶつ言い、それから隣に立つ副官たちの一人が、それから衛生兵が、それから軍医としてはたらいっている部隊の歯医者が愚痴った。そうこうするうちに、その数が多くなりすぎて、武器輸送車二台に分乗して作戦本部へ戻

るはめになった。

「こんなまぬけな話は聞いたこともない。こんなまぬけな話を聞いたことがあるかね、大佐」

「まったくまぬけだ。こう頭がいかれる前に誰か気がつかなかったのかね。なんだって事がうまく運んでる最後の最後になってからこんなのが出てくるんだ」

「きさま、ジャングル熱か何かか？ 馬鹿か？ 名前は何だ？ 何かあの船に乗りたくないわけでもあるのか。名前は何だ」

「名前を忘れたもんで、こういろいろとゴタついてるわけです」

「おいおい、テメーの名前を忘れる奴ぁおらんぞ」

「承知しております。不思議ですね。私としてもはじめてのことです。せつつくのを止めていただければ、じきに考えつくと思うのでありますが、おそらく今までは自分でわかっていたはずでありますので」

「疲れとるのか、軍曹」

「まあ、疲れてるといふほどでは。とくに気分も悪くはありません。さほどは。さほど悪い気はしませんです」

「聞いたら自分の名前がわかるか」

「さあ、ちょっとあやしいであります。騒ぎが始まったときに、ドックで名前を呼ばれたはずですがわかりませんでしたし」

「これから名前を挙げてやる。この中にお前の名前があるか」名前を半ダース唱えた。

「ははっ」と軍曹。

「ははっ、何だ」

「その中に私の名前があります」

「バカもん、その中のどれだ。きさま、からかっているんじゃないな」

「いいえ、からかっているのではないであります。自分のほうがこの話には利害が絡んでおりますし。その中の名前の一つなのは確かであります。どれだかはわからんであります。その名前すべては、本当に自分の一部を構成しているように思えますので、どれが自分のものであってもおかしくない気がするのであります。他の連中と一緒に船に乗せていただければ問題は解決すると思います。そこにいない奴が誰かわかれば、自分が誰なのかもわかります。そうすれば、だれも自分がしばらくイカレていたとは分らないでしょう。とにかく他のと船に乗せて頂きたいであります、そうすれば持ち直しますから」

「お前はずっとここにいるんだ、何がおかしいのかわかるまではな。何やらあるグループと近しかったらしいな。何のグループだ」

「ダーティー・ファイブと呼ばれていました。いつも一緒でした。この世にあってユ

ニークな者たちだったんです」

「だろうな、お前が一味なら、さもありなん。イタリア語はできるか」

「Alquanto.」

「何だと」

「少しは。何とかやっていける程度です」

「ポーランド語は？」

「Nie dobreze、さほどは。これではわかりやしません。仲間はみんな教養があって、方言で冗談を飛ばすのが好きでしたから。島の一つでは、ジョジョ人たちにポーランド語を話すように仕向けたもんです。連中はそれが英語だと思いこんで、ゴルジョウたちは、ジョジョ人の話すポーランド語がマライ語方言の一種だと信じていました」

「何が信じてたって？」

「ゴルジョウです、非ローマ人、アウトサイダーたち、ダーティー・ファイブに含まれない世界の混沌とした部分」

「お前ならジョジョ人に何を話すように教えるね」

「そうですねえ、“Jak sie masz, ジョー”とか、そんなことでしょう」

「ちょっとわしにやらせてくれ、大佐。さて坊や、こいつに今すぐかたをつげんと、どいうことになりそうかわかるか」これは船長で、人好きのする人物ではなかった。

「たぶん、あの船で故郷へ帰ることができなくなるでしょう」

「故郷に帰りたくない秘密の理由に心当たりは？」

「ないです。たぶん、軍医どの、船長、その手の精神分析はひとには向いていても自分向きではないように思いますし、名前を失念したのもあの船で故郷へ戻りたくないということではないのだと思います。自分がどれほど故郷へ還りたいか、とてもわかってはいただけないでしょう！ 何で自分の故郷を忘れてしまったのかはわかりません。どうして自分の名前を忘れてしまったのかもわかりません。こっちはまた習いなおせるでしょう。自分は名前を覚えるのは得意でありますし、今度のはまったく知らない名前というわけでもないようですから。とにかく船に乗せていただけませんか、そしたら必ず明日までにはわかりますから」

だが、船には乗せてもらえなかった。病院に入れられて、翌日、再度尋問された。その時には名前がわかっていたのだが、船長はそれが誰かの入れ知恵だと主張した。

「そいつはヨタです」と軍曹は言った。「昨晚思い出したんであります。その後、また忘れましたが、御質問と同時にまた思い出したんです。機会さえ与えていただければ、毎度思い出せるようにはなるかと存じますが」

船長は、軍曹が入れ知恵されたという自説に固執した。そして船長は軍曹を混乱させ

て、彼はまた自分の名前を忘れてしまった。前日よりずっとひどかった。軍曹は不安になって動揺してきた。強く圧迫されたらびびがはいってしまいそうに見えた。船長は邪悪な人物で、血の匂いを嗅ぎ取っていた。彼は軍曹をとて強く圧迫した。殺しに没入するにつれて、船長の首の後ろの毛は逆立ち、鼻の穴は膨らんだ。五分もしないうちに、軍曹を完全に崩壊させてしまった。

軍曹は、しばらくすすり泣いたが、その頃には船長の顔に浮かんでいた憎悪と興奮は再び仮面に覆われていた。軍曹は頭をもたげると、ひねくれたように船長に向かってニヤリとしてみせた。

「自分の名前すら忘れる人間ではありますが、閣下」と軍曹は言った。「しかし閣下のお名前は決して忘れません。なんだろうと忘れません。いずれですね、船長、お亡くなりになって地獄に落ちたら、誰かがお名前を呼ぶのが聞こえるでしょう。それが自分です。その時、それまでのことが地獄のまがいものでしかなかったようになるんです。名前がわかっていたら召還はやさしい。そして自分は降りて行って、船長を捕まえてやる」

「今のは聞き捨てならんぞ！ 軍法会議にかけてやろうか！」船長は金切り声をあげた。

「軍法会議、ですか、船長」と大佐。「こいつが地獄で会おうと言ったから？」

「だがこいつは本気だぞ。そうとも、軍法会議だ。こいつはこのわしを、将校を脅迫しておるのだ。いや、脅迫じゃない。将校に対する不敬をはたらいとるのだ」

「船長、いい加減になさい。こいつは病気なんだし、あんたもあやしいもんだ」

彼らは軍曹を駐屯地の病院に戻した。寝ると気分はだいぶ良くなった。

だが、船長は軍曹の行った脅しのことで大いに心配していたし、その心配が晴れることはなかった。そして何年もの後、死んで地獄に落ちたあと、あの決して忘れないと言った男が自分の名を呼ぶのをびくびくして待つのが、そこでの不快感に大いに寄与することになるのだった。

一、

ここでテストを行う方法はあるはずだった、というのもテスト条件は完璧なようだったからだ。第十四病棟の兵士は、よその兵士や人々と異なっているか否か。そして異なっているなら、その違いは何らかの欠陥か不釣り合いより成るものなのか。第十四病棟の入院者たちは、阿呆鳥の親類なのか、そしてどの程度近しい親類なのか。彼らと他の人々との間には、本当に無言の壁が存在しているのかどうか。

軍曹はそれについて考えてみたが、判断がつけられなかった。彼自身は正気なのに、それでも彼をめぐって誤解が発生したのだ。ハウエルはほどほどに正気だったが、病的多弁

症に苦しんでいて、世界の諸相をすべて無視した。グレゴリーはある一点を除いては正気だった。その一点というのが（誰よりも詳しいはずの）自分自身のことで、それさえ見逃してもらえれば完全に正気だった。ジョージ・バックラムは二、三の点を除けば正気だった。マーティン・ベニングは三、四の点を除けばまともだった。グリーンは半ダースほどの点でいかれていたが、その半ダースは論理的にまとまりを持ったものだった。そして、完全にいかれきっている者は一人もいなかった。

そこで残りの世界のことを考えてみるがいい。考えて、黙りこむがいい。第十四病棟を両側に百キ口建て増したとしても世界中のいかれぼんち全員に対応できるだろうか。軍曹は紙切れに計算してみた。いや、まだ大きさが足りない。これだといかれぼんちが千人/ha 以上になる計算だ。快適性の面からいって多すぎる。（訳註。えー、都市計画の専門家として言わせて頂きますと、千人/ha は団地などの人口密度としてはこの日本においてすら上限値。三百～四百人/ha あたりが無難かと存じます。）

軍曹は、第十四病棟の兵士たちも、よその兵士や人々とさして変わりはない、と結論した。彼らが閉じこめられているのは誤解によるのであって、彼らが特に変わっているからではない。

第十四病棟では、会話が王様だった。他にすることがほとんどなかったのだ。チェス盤や駒など、小物はすべて取り上げられていた。「なぜと言うに、こんな気遣いどもだと過食症もどんな形で出てくるかわかりやせんからな」と邪悪な船長が言ったせいだ。

「駒を飲み込んだ男が一人いたくらいでこれだ。その駒だって、ポーン（歩兵）だもん、駒の数に入らないよ」とハウエル。かように、船長はあまり好かれていなかった。

ハウエルはよくしゃべった。グレゴリー二等兵も同様。ジョージ・バックラムもしゃべるのが好きだったし、マーティン・ベニングも、グリーンも、軍曹もそうだった。

「この世は偶発的な事象で、条件付の宇宙である」とグリーン。「ああ、この瞬間には確固として現実だけど、この瞬間というのは任意に与えられるんだ。閉回路の電気システムみたいなものだよ。押しボタン・スイッチの押されている間だけ、すべてが存在状態に保たれている。そのスイッチを押す力がゆるめられれば、閉回路は切れて消えてしまう。全世界が消える。我々は確たる存在を保証されておらんのだよ。神が一瞬ごとに我々を存在状態に保っているんだ。神がちょっとうなずけば、我々は消滅する。だからあんまりやっこさんを退屈させないように気をつけないと、神がうなずくぜ」

「証明できんのかよ」マーティン・ベニングが詰問した。

「もちろんできるさ」と神であるグリーンは言った。「私がほんのわずか、ごく短い一瞬だけゆるめると、天の星がゆらぎ、この第十四病棟でも明かりが暗くなる」

「なんだと？ 神ってお前だったのか？」ジョージ・バックラムはいささか信じられな

い思いで尋ねた。

「ご存じなかったのかな？ だから私をあんなに気やすく扱ってきたのか」

「やってくれよ、グリーン。ちょっとゆるめてみてくれよ。宇宙を暗くしてみせろよ。さ、やれったら」

「これ、神をせかすでないぞ！ 今やってやるから、今すくな。それ！」

第十四病棟の明かりは暗くなったし、ひょっとして天の星もゆらいだかもしれない。そして病棟の明かりはまた明るくなった。

「きさま、病棟の職員があのコンプレッサーをつけにいくのを見たな」グレゴリーが攻撃した。「あのスイッチが入ると一瞬明かりが暗くなるもんな」

「その通り」神であるグリーンは答えた。「何か行動を起こすたびに新しい道具を創造するより、かつて創造した道具を活用するほうが良いであろうが。コンプレッサーも職員も我が創造に成るものであり、我が意思のままに活用するのだよ」

三、

「ぼくの症例は頭痛の種らしい」とグレゴリー二等兵。「連中は認めたがらないけど、ぼくが何なのか連中には全然わからないんだ。始めから話すわけにはいかない。自分の話の始めを覚えていないんだ。意識に呼び起こせるのは、その過去のごくわずかな部分にすぎない。でも、事実として、ぼくは歳をとらないみたいだ。それで、数年も同じ人格でいるといたたまれなくなる。これがどれほどの間、続いてきたのか検討もつかない」

「さまよえるユダヤ人みたいに？」とハウエル。「オレの六百二十三番目の話題ってのが、見当つくだらうけど、『さまよえるユダヤ人は一人か？』なんだ。これ、お前のことじゃないかな」(ハウエルの固執する説によると、この世にはちょうど千個の話題があって、かれのみがそれを完全かつ正確に整理したのだそうだ。)

「それがぼくのことだ。わかってくれて嬉しいよ。ええと、一九〇七年に一度身分を替えてる。それ以前は、記録も相当いい加減だったんだ。だから誰かがぼくの歳に疑いを持ったら、記録がごっちゃになったせいにしてたっけ。それに、身上書が二回紛失したから、その度に正式の年齢から数十年さっぴけた。インディアンとの戦争の時に一度と、南北戦争の時に一度、身上書がなくなってる」

「それだとずいぶん昔にさかのぼるなあ」と軍曹。

「一九〇七年に身分を替えたときには、百年ちょっとアメリカ陸軍でずっと軍曹をしていたよ」とグレゴリーは語った。「おもえば、あの頃がぼくの一生で一番幸せな時期だったな。その在職期間以前にも、何度か軍の義勇兵だったことがある。ぼくみたいな災難を

抱えてると、軍ってのはいいかくれみのなんだ。何年かごとに配属が変わるようにすれば、歳をとらなくても気付かれないから。その前は何世紀も海に出ていた。その前にも同じような苦勞をしたっけ。身元を替えたり動きまわったりできるような稼業がなかなかなかったんだ。誰もがこの世に居場所を持っていた。ぼくはしょっちゅう疑惑の目で見られてた」

「一九〇七年までもどろうぜ。こっちの端から見たほうがわかりやすいかもしれん」

「それが今より前で身分を変えた最後の時だな。そのときに、百年ちょいの軍曹生活を脱ぎ捨てて無許可離隊した。政治があったやつらを何人か選んで、細工してもらって、一年のうちにアメリカ陸軍アカデミーに渡りがついていた。ぼくは優秀な生徒だった。兵士としても、常に優秀だった。それに、軍曹時代の兵舎や駐屯地や戦場で過ごした三万夜の間にかかなりの数の本を読んでいたし、それ以前の何世紀もの間にだっているいろいろ読んだ。

それに、経験は、他のだれも太刀うちできないくらい持っていた。簡単すぎたよ。目立つつもりはなかった。やがて将校になった。専門は軍隊史。これほど無名な分野もないね。文献学者になった。それで何年も通してきた。講義も持った。この無名の分野で、ぼくは最先端の権威だったからね。ぼくは真実を語った。撒き菱に関するぼくの論文は、世界で一番知られざる古典だ。そうは言っても、この世で旧型の撒き菱を撒いたことがあるのはぼくだけだもん。旧型ってのは、南北戦争以前ってことだよ。そうそう、ぼくは著しく無名だったとも。ほとんど完璧だったんだ、ほとんどね」

「そして、そのキャリアにあって、きみはまずいことにつきあたりはじめたんだな」とグリーンが突っ込んだ。

「そう、ぼくほどの無名性にあっても、気がつかれはじめたんだ。髪を灰色に染めたけど、根元はいつも黒いままだった。仏頂面を身につけて、体重も増やしたけど、老いることができなかつたんだ。とうとう憎らしい軍医に目をつけられた。彼は老いに興味をもつてたんだ。

ぼくについてげんなりするような研究をしようとした。最悪だったな。気に入らなかつたな。どういうことになるか予想ついたからね。軍に四十年近くもいたあとで、ぼくの実際の歳が二十だって彼が公表したら、うさんくさく思われるのは彼じゃない、ぼくだ。狂ってると思われるのは彼じゃない、ぼくだ」

「それで五十七の歳で、また脱走した？」

「そう。それもほとんど逃げおおせたんだけどね。二十の豪州人二等兵としてならあと何十年かやっていけただろうし、その間、ずっと豪州人である必要もなかったと思う。ぼくならほかのいろんなものになれたはずだもん、それもたやすく。でも、軍の気違い病院に閉じ込められるってのは、拘束がきつすぎる。何年も監視下におかれるんじゃね。

本当のことを話してみた。いろんな嘘も試してみた。でも、放してくれない。若い豪州人の指紋と、消えたアメリカ人の老将校の指紋とが一致するのがばれた時点で（何でばれたのかは知らない）、問題が起きるのは見えてたんだ。

もうひとつの事実、ぼくの昔の書き物のなかに、未発表の論文「政府転覆の周期…軍情報局における隠された手」が発見されて、これが差し障りのある方面の怒りをかったんだ。それでぼくは狩り出されることになった。そして捕まったんだが、ぼくがぼくだって連中は信じないんだよ。なんでぼくは一つの人生から次の人生へと渡り歩かなきゃならないのかね。ほかの人にはそうそうあることじゃないはずだぜ」

「ぼくにも不思議だよ」と軍曹が言った。「きみがそれを数珠つなぎに、一つづつ、次から次へと生きてゆくことになってるのが。ぼくはと言えば、いつもいくつかの人生を同時に生きるはめになってる。どっちがましか、あるいはどっちがひどいか、ぼくにはわからん」

四、

そのインコもいんちきだった。Malaki ibon すなわち大鳥として自称していたのに本当はかなり小さかったからだ。Maliit ibon すなわち小鳥と呼ばれると、いつもそいつは怒ったように「Hindi, hindi」(ちがうちがう)と言うのだった。こいつはまたうぬぼれた鳥でもあった。自分を maganda だと言っていたが、ちっとも美しくなかなかった。

物語を語れる鳥だったが、イグナティウス・ティの通訳が必要だった。イグナティウスは何世紀もこの島々にいるキリスト教徒の支那人一家の出身だった。病棟の職員として雇われていた。

タガログ・インコ語は大変に圧縮された言語で、三～四語が訳されると数段落にも渡るのが普通だ。

「Gusto ko ng isda」とアモイ。アモイがそのインコである。

「鳥になる前は自分は魚だったって言ってるよ」ティが通訳した。「でも、魚になる前はやっぱり鳥で、それもカラスか黒ツグミだったんだって。そうだろ、アモイ」

「Pula」とアモイ。

「えっと、赤いつばさの黒ツグミだったんだって」ティの翻訳は何物にもとらわれなかった。(訳註・ぼくもそんな度胸が欲しい)「それで泥棒で、泥棒のために働いてたんだって。若い頃は貧乏で、仕事をしてやった泥棒たちも貧乏だったんだ。盗んだのはキビ。一回に御主人のところに運べるのは二～三粒だけ。だから数え切れないほど行ったり来たりする重労働で、しかも一日のあがりがり十リットルないとなくられたんだって。その次に、米泥

棒の下で米を盗んだ。もっと後では、コリアンダーの種やデーツを盗んだ。もっと後ではイチジクやオリーブなんかも。でも、これは全部、準備のためだったんだ。

一人前になった歳に、アモイは逃げだして、カラチの宝石泥棒の元で地位を得たんだって。とっても静かに店のなかに飛んでいくんだ。出るときはもっと静かに。そして、運べた宝石の分だけ金持ちにもなった。

普通、この仕事に使われたのはキンケイとかクジャクとかコトドリとか、もっと派手な鳥だった。でも、こういうのは人目をひきやすいし、長いこと注目を集めることになるでしょ。赤いつばさの黒ツグミなら、だれも怪しまない。それにアモイは派手な鳥たちより頭がよかった。これってあんまり知られていないことだけど、極楽鳥や、それとキンケイもだけど、低級な間抜けなんだ。一目でわかるような偽の宝石と本物との区別もつかないし、キズものの宝石も完璧な宝石もわからずに取ってくる。

でも、アモイは絶対間違えなかった。だから繁盛したし、御主人もそうだった。でも、次の春、ただのカササギと恋に落ちたんだ」

「Hindi bastos. Pinakamabuti」アモイは怒ったように言った。

「えっと、ただのカササギじゃなかったって言ってる」とティは翻訳した。「ただのカササギ種の中の、ただならぬカササギだったんだって。二羽は結婚して、やがて雌は buntis になった。この時、アモイは雌に美しい贈り物をしようと決めたんだって。

たまたま次の仕事で、求めるものが見つかった。アーモンドほどもある青いダイヤモンド。アモイはまずそれを飲み込んだ。それから残りのものを飲み込んだ。スター・サファイヤとか、もっと値の低いオパールとか、そんなもの。ほとんどの宝石は、アラビア語名やヒンズー語名でしかアモイは知らないから、ぼくには翻訳できないよ。ブツを持って、アモイは御主人のアリ・ベン・タイフ、またの名をピーター・ペトロフ卿、またの名をフォン・フィンゲル伯爵、そしてリオでの名はシンホル・デドス(というのは、つまり、ミスター・フィンガース)(訳註・ってことは、日本では指師、もとい指氏)のところに戻った。そして、いつものように、御主人の前に来ると、アモイは宝石を吐き出した。

スター・サファイアを吐いた。値の低いオパールを吐いた。それに、アラビア語名やヒンズー語名しかアモイにわからないその他の宝石も。でも、青いダイヤモンドだけは出さなかった。くっついちゃってたんだ。

このくっついちゃったのが、肉体的なものだったのか、それともただならぬカササギによって引き起こされたトラウマによる精神的なものだったのかは、この病棟にネズミみたいにちょろちょろ出入りしてる精神分析屋さんに任せるよ。アモイはそれを妻のために欲しいと密かに思ったんだ。だから、アリ・ベンのために吐き出すのを拒否したんだ。それでかれは脅された。拷問にもかけられた。

でも、生きのびるためには、吐き出すことはできなかった。(だって、くっついちゃってたんだもん)。そしたらピーター卿(アリ・ベン)はアモイの喉をかき切って、結局寶石を手に入れたわけ。

その後、彼は死んで(アモイが)(ピーター卿のほうはその十二か月後に死んだんだ)魚に生まれかわった(アモイが)。ピーター卿は口バに生まれかわって、あの青いダイヤモンドが出た鉱山で、小さな荷車に岩を積んで引かされてるんだって。

ああ、ぼくはもう仕事にいかなくちゃならないけど、アモイが、魚だった頃の話をしてくれるって。もしわかんないところがあったら、また来たときにぼくが説明してあげるから」

「ISDA」とイグナティウス・ティの去った後でアモイは言った。そして、これがアモイの魚だった頃の物語のすべてだった。もしこれがガログ・インコ語から翻訳されれば、面白い話になるだろう。

アモイは自分の名が好きではなかった。これは、臭い、という意味なのだ。だが、それも今では彼にぴったりの不可分のものとなっていた。アモイは強い古い匂いを持っていて、病気の死にかけた鳥だったからだ。

アモイの病気は、あるサディストの医学生が、彼が苦悶するのを見たいがために腐食性の毒を飲ませたためだった。アモイはものすごい苦しみようで、かれがげっぷをすると火を噴く、と人は言ったものだ。だが、中身は腐食されつくされていても、彼は生に執着していた。また、外部からも死刑宣告がなされていて、あの臭い鳥を殺すよう公式命令が下っていた。だが、危険がせまると彼は木の上に逃げて、友だちとしゃべりに病棟に入ってくるのは夜遅くだけだった。

アモイは本当は精神異常ではなかった。彼はひょっとして、病棟で一番バランスのとれた存在だった。彼の被害妄想は、妄想ではなかった。彼は本当に迫害されていたのだ。彼は嫌われていると思っていただけではない。本当に嫌われていたのだ。友人たちの間ですら彼は嫌われていた。が、彼はつとめて明るく振る舞おうとはしていたのだった。

五、

船長は不機嫌だった。最悪の問題が、グレゴリー二等兵だった。船長に言わせると、グレゴリーの妄想は性体験が少なすぎるためだそうだ。

「船長、そんなものはいくらでもあります。もっとも最近ほとんど御無沙汰ですが。こないだの晩にかんじょうしてみたら、五百年さかのぼっただけで三十人の妻が思いだせました。体験の深みはそれほどでもないですが、広がりから言えばすごいですよ。ぼくみた

いな長生きした人物がほかにいれば別ですが、たぶんぼくはこの世の誰よりも経験豊富なはずです」

これがいつも船長を怒らせた。自分の考えと矛盾することを言われるのが大嫌いな人だった。グレゴリーに関する基本事項を、船長は嘘だと信じていたのに、グレゴリーはそれが事実だと知っていたのだ。この二人では決して折り合えない。

グレゴリーに腹をたてると、船長はいつもハウエルにあたるのだった。不幸なことだ、というのも、船長とハウエルは似たところがなきにしもあらずで（二人ともしゃべりすぎだった）、船長のほうがいつも最初から腹をたてていなければ、二人は結構うまくやっていけたかもしれなかったからだ。だが、それを言うならハウエルのほうだって、医者に関するさる理論を持っていて、それを聞けば船長だって、いささかもハウエルと意気投合するようなことはなかつたろう。（その理論はここには挙げない。それに該当するのは全医者の半数以下にすぎない）

ハウエルはどこがおかしかったかと言えば、左手に妙なひきつりと震えが起きるというだけで、それが最終身体検査で発見されたのだ。肉体的な原因が発見されなかったので、精神的なものにちがいない、と判断された。そして彼が了見の狭い分析医たちの怒りをなだめようと軽い冗談をとばすと、その冗談がちょっとキツかったせいもあって、この男は完全にいかれきっている、と判断されてしまった。

船長に言わせると、ハウエルのひきつりは性体験が少なすぎるためだそうだ。

「船長、何をおっしゃる。あたしゃ女なんぞ掃いて捨てるほどだったんですぜ」とハウエル。「その後は、この世で一番ピチピチした女房を持ってたし、グレゴリーが広がりなら、こっちは深みの男ですよ」

「どっかに抑圧があったんだ。間違いない。肝心なのは、あらゆる抑制を取り去ることだ。その左手にはすべて好きなようにさせなくてはならん」

「右手のやってることを教えてやってもいいんですか」

「おかしなことをきくものだな、何のことかわしにはよくわからん。お前はそんな具合に、自分の左手を別個の知性を持っているかのように人格化しとるのか。面白い。思ったよりいかれ具合が進行しとるな。だが、その左手にはすべて好きなようにさせなくてはならん」

ハウエルは左手をのばして、船長のチョビひげから毛を三本引き抜いたので、ひげはちょうど一割減となった。船長は不機嫌になり、チョビひげの残り二十七本の毛はひきつつ震えた。彼自身もコンプレックスを起こす危険があった。

この後、彼は軍曹にあたった。船長は毎日同じことを同じ順番にやっていた。グレゴリーに腹をたててハウエルのところへ来て、ハウエルに一層腹をたてて軍曹のところに来

るのだ。

「今日は何という名だ」といつも尋問した。「ほれ、どうした、何とか言わんか、サルヴァトーレか、シュルツか、スツィマンスキーか、ストラナハンか、ソッリか、か？」毎日こうして軍曹に名前を投げつけたが、たいがいそれは同じ五つか六つだった。

「そんなのどれかじゃないといけませんか」と軍曹は尋ねた。「もっと他の誰かになったら駄目ですか」

「こいつらは貴様の言うダーティー・ファイブだ。貴様、ダーティー・ファイブの一人だとか言っただろうが」

「そんなこと言いましたっけ。そんなのの一人でしたっけ。どうせーから出直すんなら、まったく新しい人物になりたいなあ。前に、そのなかのどれかが自分かどうかってお尋ねになりましたよね。そいつら全部が自分みたいな気がするんです」

「わしと戯れるでないぞ。自分の名前くらいは覚えねばならんのだ。こういう、名前を忘れるってのは、性体験が不十分なために起こるのだ」

「ってことは、ぼくはサルヴァトーレにはなれないってことですよ」

「サルヴァトーレだと、そいつはあっちの方面はいける奴だったのか？ そいつのことを話してみる。サルヴァトーレってのはどんな奴だった？」

「あーあ、そんなぎょろ目はしまっといてくださいよ、船長。とにかく今日は、名前を選びたい気分じゃないんです」

船長は少しも協力を得られなかった。彼は自分のテントに戻ると、この三つの症例に関する記憶を書き足した。そして三つの症例のほうでは、彼に関する記録を比べ合っていた。

グレゴリー二等兵は大きくてハンサムな男で、でかいカボチャほどのサイズと形の、紫がかった頭蓋をしていた。なに、矛盾なものか。彼にくっついていると、そんなものも良く見えるのだ。なにかと目立つ男だったから、無名でいるのが難しかったのはよくわかる。だが、彼のマスとしての大きさと、紫のドームが原点だった。それだけは本物。

「ぼくがヘンリーなら」と軍曹は思った。「グレゴリーはとても大きい。ぼくよりも大きいんだから。そしてもしぼくがヘンリーでないやつらの一人でも、グレゴリーはまだ大きいけど、ぼくがヘンリーだった場合ほどは大きくない」

一同は病棟の中で幽霊話をされていて、グレゴリー二等兵は幽霊も悪魔も同じものだと行って悪魔物語を語った。

「完璧な幽霊話はひょうい物語だ。そしてひょういというのは、墓場の彼方からの催眠術だ。これは有り得る。催眠術は意思によるもので、意思は不死だから、数々の有名人がひょういされているし、そういう人々の人生はすべて一つのパターンにはまっているよう

なんだ。取るに足らない前期、ファウストの立った地点に立たされた分岐点、そして決断。それから取引をして後の、権力の座への上昇、影響力、ほとんど全宇宙的な名声。でも、それを達成したのは彼ら自身じゃない、内部の悪魔だ。この世の運用を行っているのは多くがこのひょういされた人々だし、彼らの物語こそが想像の及ぶ限りで一番こわい。でも、そういう偉人たちを見る人々は、それが幽霊の住まう殻にすぎないってことを知らない」

「幽霊話ってのは、要するに怪談よ」とハウエル。「背筋をぞっとさせるやつさ。では、そういうおっかないものって言えば何か？ お前の言った悪魔があるな。暗闇。死人。なかでも一番身の毛がよだつのは、死人だ。死人ってえのは、身近な者がおっかなくなったものだからな。生きかえった死人、起き上がってくる死体、こいつが幽霊話のミソだよ。あんまりおっかないんで、ユーモアをまぶしてやらないと我慢できない。アイルランドの通夜話のエッセンスがこれね。

なんで生きかえった死人はただの生きてるやつより怖いのか。本当なら、あの世の謎を身にまとっているから愛情と尊敬を倍にして受けてもいいはずだろ。別れの悲しみの分、帰還は喜ばれてもいいはずだろ。でも実際はそうはいかない。みんな、よみがえった死人は怖がる」

グレゴリーが割りこんだ。「幽霊の恐怖は初期の反キリスト教にさかのぼる。ローマ時代に我々を怖がらせようというので、その手の反キリスト話が作られたのを覚えてるよ。こいつがこの新しい宗教の大きな障害だったし、敵もこれを最大限に利用したね。

当時の人間で、神の慈悲に触れていない者の身になってごらん。殺されて切り裂かれ、包まれて埋められ、墓は金曜の夜に封印された男がいる。そいつが日曜の朝になると死者の中から立ち上がって、二日目の死体として地上をうろつき、地獄にいたってふれ歩いてる。

ローマ時代の帝国の子供たちにとって、これがゾンビだった。墓を破って、夜中に閉まった戸を通してやってくる死人」

そう言うグレゴリー自身、暗い明かりの下で紫色の幽霊のように見えだし、そういう話し方をするとなんだか不気味な感じがした。

「おしゃべりはもう十分だろ」と病棟職員のイグナティウス・ティ。「みんなを黙らせるために来させられたんだけど、その前にぼくがお話をしてあげる。夜中には仕事があるし、時間もほとんどないから、今すぐ始めるね。まず、なんで真夜中がこわい時間なのか話してあげよう。

ぼくの出身は、ここの南の島なんだけど、こんな習慣があったんだ。人が病気で死ぬしかないそう話してあげると、その人は夜中に死のうって決めてそれで本当に死ぬんだ。

こうすると同時に死ぬ人がこの世に何人かいて仲間ができるから、逝くときに一人ぼっちじゃなくていいんだ。真夜中で、魂があの世界に行くとき、あの世界とこの世の間に一瞬、穴が空くんだって。そうすると、もし昔に死んだ中のだれかがすばしっこいと、その穴を通してそいつがこの世に戻ってこられるんだってさ。あんたたちみたいな気違いでも、真夜中には何か落ち着かないのがいつもわかるよ。ここでは昔ほどたくさん死んでないけど。暗い中に一人で残されるのが嫌いなのは、みんな中に半分幽霊がいるからなんだ。

普通は恐れを知らないこのぼくでも、なんか気になる。ときどき死体を一晩ここで預かることがあって、いつもは備品室のどれかに台車で運ばれるんだ。あそこはいつも暗くて、何か備品を取ってくるように言われると不安になる。もし、死人が起き上がったらどうしよう。ときどきシーツを持ちあげてしてみるんだ。しばらく覆っておいて、ぱっとそれをどけて、目が開いているところが見られるか試すの。

もう一つ、死体のまわりでうろろうする人に言うとおきたいこと。ぜったいに奴らに背を向けないこと。そうしないと、もし柵からただの薬のびんが落ちて割れたとき、死人がやったんだって思うから。頭の上にゆたんぼが落ちてこってきたら、死人が投げつけたんだって思うから。ヤモリやなんかのトカゲが肩に落ちてきたとき、それが死人の手だなんて思っちゃうから。

別に危険があって、それが冗談屋。新人職員はみんな冗談のタネにされるんだ。夜中に、死体の置かれた部屋に、何かつまらない理由で行かされるんだ。でも、そこにいるのは本物の死体じゃない。盗んだアルコールを飲みすぎて、いたずら気分になってる医学生なの。それで、背を向けると、そいつが死からよみがえってこっちを縛りあげるんだ。これをやられると、心臓が凍るよ。医学生内では、これが冗談で通るんだ。

これにも対処療法があって、ぼくの友だちがそれをやった。この仕事の、ぼくの前任者だったんだけど、それをやられたときも冷静だったんだって。『だからいつも、死体はきちり確認しろって医者に言ってるのに』って言うんだ。『ブタだって、のどを掻き切っとくぐらいのことはしとくもんなのに』って、医学生のいたずら者ののどぼとけにきついチョップを食らわせて、同時に飛び出しナイフをあける。すると医学生は、自分ののどが掻き切られたって思うだろ。のどぼとけへの一撃と、のどを切られるのって、一瞬は同じ感じだから。それにその友だちは片目がやぶにらみで、暗い中で人を睨むと険悪な感じがするんだ。医学生だって怖がらせられるんだよ。

でも、話に戻るね。友だちのハウエル君は、一番おっかないのが、起き上がる死体だって言ったよね。(訳註・もっと恐ろしいものとして、かっぱれを踊る死体、というのが東洋神国で報告されている。)もしそうなら、ぼくの島の人たちは凄いいおっかないことになる。だって、死体は全部起き上がってるんだもん。ってのは、お通夜のときに起き上ら

れて、起き上がった状態で埋められるから。だから、こわがられるのは起き上がる死体じゃなくて、ベッドに入る死体なの。

で。これがそのお話。あるところに若妻がいて、ある晩、旦那が来てベッドに入った。『あら、脇のどこ、どうしたの？ おっきな穴があいてるわよ。ナイフかなんかで突き刺したみたい』『いや、素潜りやってたときに岩ですったんだよ。そんなおっきな穴じゃないよ。暗いところでは何でも大きく見えるのは知ってるだろ』

奥さんはそれ以上は深く考えないで、朝になったら旦那さんは消えてた。そしたら友だちが来て、前の日に泥棒がその旦那さんの脇をナイフで刺して殺して、死体を遠くの木の下に放ってきたことを話してくれた。だから、いっしょに寝たのは幽霊で、奥さんはそれを知らなかったんだ。それを考えると、奥さんはおっかなくなっちゃった。これがそのお話」

「それだけ？」とグリーン。

「もちろんこれだけ。いいお話でしょう。起き上がる幽霊のお話なんて誰にでもできるけど、ぼくのはベッドに入る幽霊に関する唯一のお話だもんね。組み立てもしっかりしてるし、サスペンスもあるし、静かなクライマックスもある。そして後になって効いてくると・ちゅどおん、ていうのが今風の言い方だと思う。(訳註・これが出る頃にはチョイフルかもね)

イグナティウス・ティは、もうゆたんぼを持って仕事に行かなければならなかった。真夜中で、あの世の境に穴から幽霊が数匹ゆらゆらと出てきて、気違い病棟に迷いこんだ。ここだとアット・ホームな感じがしたからで、幽霊たちは寝台の脚に座って、男たちの思考と戯れるのだった。

六、

マーティン・ベニングは数週間で退院して、グリーンも去り、ジョージ・バックラムもハウエルも去った。アモイは死んだ。絶望と孤独と恐ろしい苦悶の中での死だった。もう古参はあまり残っていなかった。そして新人は陰気で病気がちで内に秘めた炎がなかった。

ある日、マラヤ人の少年がやってきて、軍曹を名前で呼ぶと、もううちに帰る頃だ、と告げた。

「きみがぼくの名前を知っているのは変だな。ぼくですえ知らないのに」と軍曹。

「あんたは緑の島々にもう十分滞在したはずだ、軍曹。そろそろあんたも成長する時期だろう」

「ここに残ろうかとも思ったんだが。ぼくにとって、緑の島々はエデンの園みたいだっ

た。もしここを離れれば、ぼくに残されるのは世界だけだ」

「またいつか来ることもあるさ。そのときもほとんど変わってないかもしれない。でも、エデンの園ではないんだよ。これからぼくたちは、もう一回陽気な昔ながらの時を味わうんだ。そしたらあんたは帰らなきゃならない」

二人はひょうたんでジャングル・ジュースを飲んでいて、この病棟では通常、そんなことは行われぬ。だが二人はその病棟に今いるのではなかったし、その島にすらいなかった。

二人は別の、もっと初期の島を離れ、そして大陸にいた。シドニーの通りを歩いているところで、やがてプラザ・ホテルにやってきた。「ぼくはここには入れない。でも、あんたは昔の友だちに会ってくるといい。ぼくはインドネシア・クラブに行って、二三杯ひっかけってくる。そしたらカヌーに乗ってよそに行こう」

軍曹はプラザに入って、トム・シャイアにフレディー・キャッスルとジンをのんだ。トムは、前は巨大で金髪だったのが今は小さくて黒髪だった。でもそれ以外は二人とも変わりはなく、軍曹のことをよく覚えてくれていた。

彼らは三人の赤毛娘に会った。名前はモイラ・モンロニー、ローズマリー・リオルデン、ミニー・マックギンティー。一同はドリンクを混ぜっこして仲良くなった。みんなそれぞれ見事なジョークをとばして、軍曹はながいことローズマリーのひざにすわっていた。

「あなたとお友だちは伝説に出てくるわね」とローズマリー。「そしてあなた自身も、最初のイリリアから来てる。あなたはデミウルゴスのイアソンの息子。もっとも自分では、父の名はジウリオで彼ものろまだったって思ってるんでしょうけど。あなたの仲間はオルフェウス、ペレウス、エウフェメス、メレアガー。後の時期に、ディオスクリとも仲間になる。自らの意志に反して畑に龍の歯を植える。アエーテスの娘が、その様々な形態でおまえを愛するだろう。(ちなみにあたしもその形態の一つ)。そして羊毛を発見した後も、発見したことに気付かないだろう。

そして、イオルクスの街に生身で還ることはないでしょう」

その後、彼らは街を散歩に行き、オズワルド通りという名の小径を過ぎた。

「時々、横を通ると、この径はここには全然なかったりするの」とローズマリーは軍曹に話した。「そしてこの径を下ってゆくと、時々ダーリングハーストに出たり、時々はロンドンに出たりするわ。雲が出てくる。急いであたしの肩に乗って。そうしないと道に貼りついてしまう」

軍曹はそれに従った。さもなくば霧のために道に貼りつき、そのままそこで失せ去り、様々な生をそれ以上生きることなかっただろう。こうしたか細い存在によって、我々は時に救われるのである。

「薬草のローズマリーが、霧で地面に貼りつくのに対する特効薬なのを忘れないことね
「危険には必須」とローズマリー・リオルデン。

その後（というのはかなり後のことにちがいない。二人は島々に戻っていたから）、軍曹はマラヤ人の少年と珊瑚礁から出て、カヌーから飛び込むと水中を泳いだ。

「カヌーの名前は？」軍曹は尋ねた。

「これは Aral 即ち『妨害』と名付けられている。Bumi すなわち『この世の』と名付けられている。Aragh 即ち『方向』と名付けられている」と少年。それで軍曹は、これがアルゴ船であることを悟ったのである。

二人は泳いでいること水中を泳いでいたが、そこには信じられないほど濡れていた。海水は、水にしてもあまり濡れていない。水より濡れたものだってある。

アルコール・マッサージはもっと濡れているし、それが正体だった。病棟ではもう真昼だった。

「ほかにどんな昼があるんだろう」軍曹は声に出して尋ねた。

「知りませんよ、軍曹さん。一体他にどんな昼があるんです？」褐色の病棟職員が尋ねた。

「ぼくに話してたんですか、それとも独り言？」

「今のはそれがよくわからん」

軍曹はちょっと熱を出したので、マッサージを受けていたのだった。寝ていたわけではないが、太陽や影を眺めているうちに白昼夢を見ていたのだ。

この白昼夢は、彼がモイラ・モンロニーとローズマリー・リオルデンとミニー・マックギンティーとに出会った人生唯一の時だったが、それでも三人ともみんな、本当にいい友だちだったし、彼は決してみんなを忘れないだろう。たぶんあの娘たちも、あの娘たちなりに、決してぼくを忘れないだろう、と軍曹は思った。

軍曹は、もう自分は大丈夫だからうちに帰してくれ、とふれてまわった。これにはちょっとかかった。それまでの評判がまずかったせいだ。

でも、本当に大丈夫なのだ、ということがじきに判明してきた。二週間半かかったが、それで帰途についた。

病棟に残してきたのは、古い友だちではグレゴリー二等兵ただ一人で、かれは永遠に生きるよう運命づけられているらしい一方、その永遠の生をこの病棟で送ることになるのではないか、とえらく恐れていた。

第4章

ストラナハン、またはメレガー

1.

行為者と駆動者の殿堂を逃れすべてを五人衆の生と取り替え

